
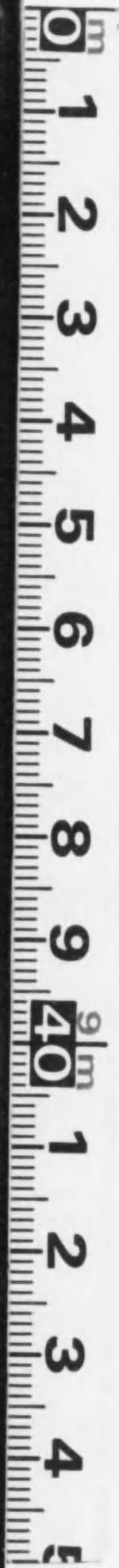


049  
Ma73

049-Ma73ㄅ  
  
1200500724406



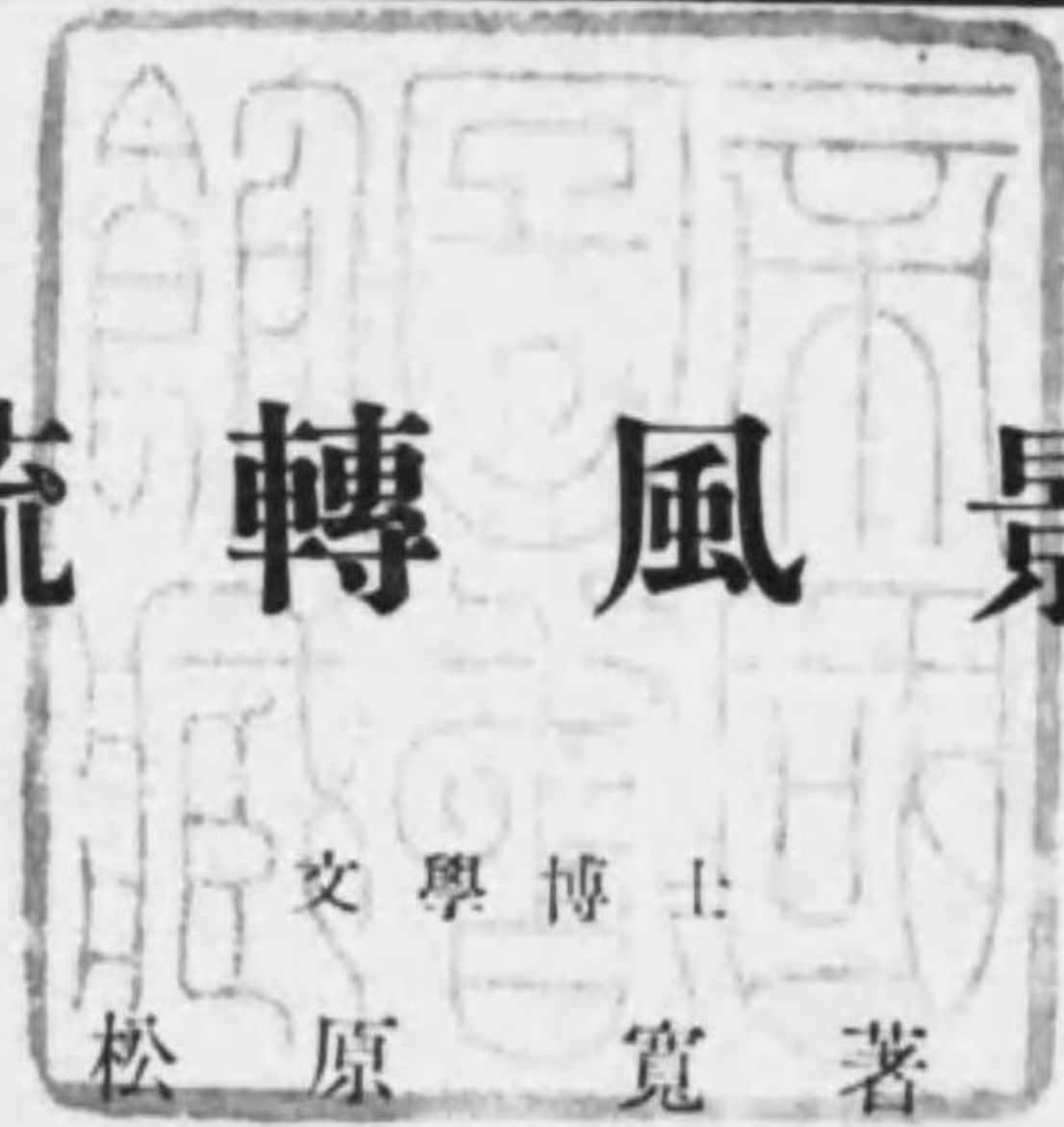
始



水2474  
7

049  
MA73

# 流轉風景



東京 四條書房 發行



145-225

# 流轉風景目次

わが子わが親の記	一
亡き父を憶ふ	三
母上京す	一三
子を思ひ親に謝す	一五
愛する眞に與ふ	一八
子病む	二二
母のこ	三一
母逝く	三五
旅日記	四九

芝

ライオン徒然草……………五二  
 龍華寺詣で……………五七  
 三保の明け暮れ……………六六  
 房州の旅……………六九  
 新潟の行き……………七三  
 東北の旅……………七七  
 伊太利會遊を憶ふ……………八〇  
 十和田湖と大湯温泉……………八三  
 温泉さまざま……………八五  
 江の島よりカプリを憶ふ……………八七  
 ダンスと旅心……………九〇  
 旅に病む……………九四  
 芝居と音楽……………九七

世

文五郎とお園……………九九  
 松薦のよさ……………一〇三  
 『宇都宮城史』の大詰……………一〇六  
 シュメー女史を聴く……………一〇九  
 人間尊氏……………一一三  
 さつきの芝居……………一二六  
 『播摩』の愛憎……………一三三  
 鴨綠江節のおほどかさ……………一三五  
 思想劇のこと……………一三八  
 水谷八重子の演技……………一三〇  
 人形劇と宗教……………一三四  
 世相雑感……………一四五  
 煩悶解決法……………一四七

祖國美の認識	一五三
論理の悲哀	一五五
塞翁が馬	一六一
新年	一六四
不義理の辯	一六九
精神と物質	一七三
文教の府のあらし	一七五
教育界の慢り	一八三
貧に伸びる者	一九一
不合理への反撥	一九三
社交と趣味	一九七
「大學轉落」の意味	一九九
農村青年に訴ふ	二〇三

感

さみだれ日記	二二五
マダムのジング・ザック	二三〇
信 仰 癡 痺	二三三
酉の市の感想	二三九
記者生活の思ひ出	二三四
傷 錄	二四一
家を求むるの記	二四二
魂の憩ひ家を求めて	二四六
身延を下る頃	二四九
感傷のひとつとき	二五三
雨	二五五
秋の生活風景	二五六
人の世の姿	二五九

交

冬	の	夜	の	出	來	事	.....	二六一
陶	醉	な	き	詩	情	.....	二六四	
春	雨	.....	.....	.....	.....	.....	二六七	
流	轉	感	想	.....	.....	.....	二六八	
小	狗	第	三	世	.....	.....	二七一	
秋	の	觀	傷	.....	.....	.....	二七三	
年	の	瀨	.....	.....	.....	.....	二七四	
聖	き	憧	れ	.....	.....	.....	二七七	
春	の	身	邊	.....	.....	.....	二七九	
あ	る	日	曜	日	.....	.....	二八三	
わ	が	庭	.....	.....	.....	.....	二八四	
誕	生	日	.....	.....	.....	.....	二八七	
遊	記	.....	.....	.....	.....	.....	二八九	

わ	が	友	の	巡	禮	記	.....	二九二
松	平	里	子	夫	人	を	憶	ふ
友	情	.....	.....	.....	.....	.....	二九五	
舊	知	の	人	々	.....	.....	二九八	
綱	脇	龍	奴	氏	の	苦	心	.....
氣	の	毒	な	〇	君	.....	三〇三	
天	才	兒	の	運	命	を	憶	ふ
「	佛	教	概	論	」	の	江	部
氏	.....	.....	.....	.....	.....	.....	三〇六	
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	三〇九	

わが子わが親の記





は不思議に思ふのである。富裕であるとか、母が美貌であるとか、或は地位が高いとか、云ふのならば、まだしも、さう云つた條件は一つも備えてゐない。それかと云つて父と母とがもと／＼相思の間であつたと云ふ事も耳にしてゐない。のみならず父その者は従順であるとか温良であるとか、云つた様な養子となるやうな柄の人ではなかつた。自負心が馬鹿に強くて氣位が高い。あまつさへ剛情我慢の人で、さう云ふ人が何の視る處があつてこの家に養子縁組をしたか、今もつて不思議の限りである。

松原家には私の母なる人の上に一人の兄がゐた。この兄即ち私の伯父に當る人は、現實の方面では中々の偉者であつた。ところがその父、つまり私の祖父は又まるで良寛みた様な風格の人で全く現實を超越して居つた。だから祖父の時代になつてから、家は一日／＼と貧乏して行つた。それでも祖父は少しも顧る處はなかつた。相變らず呑気に冬の日に、日向ぼつこをし乍ら、御文書を寫してゐる程の人であつた。斯んな仙人みた様な人に又不思議にも出來た伯父は、尋常一様の人ではなかつた。伯父を思ふ毎に、私は何時も大倉喜八郎だの安田善次郎だのと云つた人を聯想しない譯には行かない。頭も中々鋭いし腕も達者で、自信も素晴しく強か

つた。丁度この伯父と私の母とが生れた當時は、家は赤貧洗ふが如き有様であつた。伯父は九つや十のがんぜない頃から、家運の挽回にいそしまねばならぬ境遇であつた。幸ひ赤手空拳の奮闘の功あつて、家は次第に順調になつて來た。斯うなると伯父の自信と自負心とは益々高くなつて來た。丁度家運の芽が出やうか出まいかと云ふ頃、私の父が養子となつて迎へられて來た。斯様な伯父に見込まれる父丈あつて、父も亦確り者であつた。併し二人の剛の者が揃つては兩雄並び立たざる道理で、折合が面白くなかつた。父と母とは遂に分家して一家を立てた。一家を立てた後も伯父は尙、事毎に父に干渉するのであつた。父の自尊心を傷つける事一通りではなかつた。

と云ふのも、伯父には俺が兄だと云ふ氣持が絶えず働いてゐるし、然も伯父の仕事は萬事とん／＼拍子で運ばれて行つた。だから、遠慮もなくあけすけに私の父にくちばしを容れるのだつた。それに引かへ父の方は、事多くは志と違つて行つた。にも關らず、父の自信は少しも減ずるところか、反撥的に強くなつて來た。父にしては、分家と云ふものゝ大した財産を分けて貰つてゐる譯でなし、又弟分であるとは云ひ條、年は伯父よりも上であつた。何、兄に敗けるも

のかと云ふ様な氣は何時いつも働いてゐた。それなのに、絶えざる壓迫あつぱくと干渉かんじやうとを受けるのがとても辛く思はれた。

## 二

それまで家は、その市を離れる事十二、三里位の郡部にあるのであつたが、かゝる事情じじやうに快々として樂たのしまない父は、遂に意を決して、家屋敷を疊たたんでN市に移住いじゆうすることとした。もとより父は伯父に一言の相談さうだんをしたのではなかつた。寧ろ伯父に對する反抗心はんかうしんから出たので、晴天のへきれきの様に出發の前日、父は挨拶あいさつに出かけたのである。この唐突な挨拶に、伯父は愕然がくぜんと驚いた。否、それよりか自尊心を傷つけられた。でも兎も角とく百方慰留ゐりゆうしやうとしたが、時すでに遅かつた。もう家も屋敷も賣拂うりかひはれてしまつて、何もかも後の祭であつた。

ちやうど今から三百年許り前にメー・フラワー號の舟に乗つて、アメリカの新大陸しんたいりくに向けて航する一群の團體だんたいがあつた。英國政府の壓政あつせいに堪えかねて、新天地を望んで彼等は旅するのであつた。前途に光明を認めるとは云へ、雄々しくも祖國そこくを別れて行く彼等の心事しんじを願ねがひて私は

何時も悲壯ひさうの感に打たれる。N市に新天地しんてんちを得やうとして故山に別れ行く父の心は、當にこの一團の人の心であつた。その郷里きやうりとN市との距離きりはわずか十里そこ／＼のものではあつたが、そこを出て移住いじゆうするなど、云ふ事は、その頃ではまるで外國行きよりも、もつと遠い様に感じられるのであつた。そんな因襲いんじゆうと傳統でんとうとに捕へられた中から此の擧あがりに出るのは、眞に乾坤けんこん一擲てきの大事業であつた。私はこの父の壯舉さうきよに對して、心から感謝かんしゃするものである。もしも父が伯父の壓迫あつぱくに甘んじてゐたならば、何時の日にか到底たうてい浮ぶ瀬はなかつたであらう。私は満足まんじくな教育すらも受ける事は出来なかつたであらう。今頃は精々どこかの小作人となつて、鋤鉞すくせんを取つてゐただらうと思ふ。丁度この頃私は十になるがならぬかの頃であつた。不法に對する父の反抗心はんかうしんと奮發心ふんぱつしんとが、私の幼わかな心に深く印象いんしやうされた。今以て私にはその影かげをやどしてゐる。或はこれが父からゆづり受けた貴い遺産いさんであるかとも思つたりする。

## 三

斯くてN市に志こころざしを立て、出るには出たが、その後の私の家は決して多幸たさいではなかつた。家

を移して家庭生活の基礎がたつたかたゝないうちに母は大病に取つかれる身となつた。あつちの醫者こつちの薬と騒いでみたが、一向に利き目が無い。遂に病院に入る事となつた。家を擧げての介抱の甲斐があつて、命だけは取止めたものゝもつて來た家産は漸く傾いて居つた。これではならぬと、兄と父とは努力に餘念はなかつた様である。何とかしてなけなしになつて來た家産を、もり返さうと父は焦慮に焦慮した。恐らくは餘りにあせつた結果だらう。何か知ら法に問ふ處となつて、父は不意に收監されたのであつた。もとより一家は擧げて色を失つた。兄は毎日未決監に入つてゐる父への差入物に忙がしかつた。一旦、嫌疑をかけられて收監された以上、病後幾何ならぬ母と、兄と私とがどんなに泣きわめいてもしかたがなかつた。ゑんをそゝいで貰はふ爲に、辯護士を頼まうといくら兄から申出でも、父は頑として之を受付けなかつた。恐らく父にしても、辯護士を頼んで多額の費用をかけたりしてはと、家族の暮しが思はれたからであらう。

私が父を待つたのは、その當時ほど切なるものはなかつた。今考へても誠に佗しい限りであつた。子供心にも黯黠たる雲が何時も覆ひかぶさつてゐる様な氣がするのであつた。朝學校に

出かける時も、今日は父が歸つて來るか。學校から歸る時も、もう父が歸つて來たかと念じながら歸つて、幾日も幾日も、無駄なのを經驗するのであつた。こんな日が四十日も續いたのは悲しくもつらかつた。併し幸ひに待つ甲斐あつて、父は罪に陥る事なく無事に歸つて來た。

この時の喜びと云つたらもとより例へ様もない。父は分けた頭もひげもそりおとして來た。それが異様に思はれたが、それも嬉しかつた。島崎藤村氏が佛蘭西に行つた折、祖國で自分を思つてゐる人を偲んで、惱しさに耐へ兼ねてひげをそり下す様な事が、「新生」にかいてある。父の當時の心境を斯んなものであつたらうかと想像する。これと云ふのも全く佛様の御蔭である。と、しみじみと述懐するのであつた。父は四十日の間に佛の道に志し、毎日々々御經をよむ事を始めて居た。父に取つては、四十日のひとりの生活は、キリストのヨルダン河のはとりなる荒野の修業にもあたるのだつた。父の毅然たる信仰は、辯護士などの助けを借り様と思はせなかつた。兄の要求を強ひてこぼんだのは、決して無理ではなかつた。その後の父は本當に佛門精進の人となつて、只管信心堅固の道を歩むのであつた。その後は毎日寺町なるC寺の清正公に參詣する事を怠らなかつた。私もよく連れられて參つたものだつた。斯かる父の信仰生活

は父と母との救であつた許りでなく、又私にとつて此の上もなく貴い宗教教育であつた。教育は議論ではない。生活からの流れる、うるは、ひでなければ嘘である。

かくて父は私の最もよき教育者であつた。私が學校に入つてから勿論私はよき先生を得た。

更に長ずるに及んで、キリストを知り、ソクラテスを學び、カントを教へられた。併し之等の大賢聖哲にもまさり、亡き父は私にとつて最大の教育者であつた事が、漸く歳長けた今日此頃になつて分つて來るのである。「子養はんとすれば親坐しませず」の感、愈々深い。

今にして思へば、私は父の前にはまことに不幸な子であつた。父は最愛兒なる私に對し無限の恨みを呑んで逝つたのであつた。夫を思へば、誠に斷腸の念のみ募るのである。最愛の兒に恨みを呑むと云ふのは、何と皮肉な悲劇であらう。と云ふのも父子の思想の衝突であつた。夫が私が父に對して犯した唯一の不孝であつた。否最大の不孝な行ひであつた。併し私とて最初からあながち不孝者でもなかつた。むしろ従順な兒であつた。中學を出るまで何一つ父に反抗した事はなかつた。又反抗させるやうな無理を云ふ父でもなかつた。して又餘り父から叱られねばならぬ私でもなかつた。は、たちになる迄の間に父から叱られた事が三度びある。それは今でも覺

へて居る。父の云ふ事には唯頭の下がるのみであつた。

ところが中學を卒へるや、私は父の意に、無理にも反して、私自分の道を辿らうとした、これが父の失望の最大なるものであつた。

「その父その母に従ふ者は我に従はざるなり」との基督の言葉を文字通りに解して、私は父に叛いた。自分の杖とも光りとも思つて居た子の叛逆は、云ふ許りなく、父をして厭世の念を抱かした。父が身まかつたのは、それから間もない事である。父の死期を早めたのは、それで私自身であるとすら思はれるのだ。不幸の自分を覺る頃には、父は黄泉の客である。いかにして此罪を詫びやう。これが何時も私を苦しめて居る。

## 母 上 京 す

八月の初旬だつた。旅から家に歸つたら、國から私の老母が来て居た。全く思ひ設けぬ事だつたので、只々私は驚くのみであつた。私の家に出産があると云ふので、三百里の南から一人で出かけて来てくれたのださうな。炎熱焼く盛夏、二日二晩汽車に乗らねばならぬ。それも七時に手も届かうと云ふのに、一人では全く驚きも驚いたが、只々恐入つて頭が自ら下がるのだつた。

私は不在であるし、電報もおくれたかして、家から誰も驛に迎ひに行かなかつたと云ふ事である。心配のため汽車中一睡もしなかつた母は、始めての東京に東も西も分らないし、尋ね求めて電車を幾度も乗りかへては、この草深い松澤の里にやつて来たのであつた。よくまあ一人でこの老體で来られたものだ、寧ろ私は奇蹟でもあつたやうに驚かずには居られない。東京の生活になれた私であるのに、一寸電車が遅れたり、訪ねる家が分らなかつたりすると、すぐ

圓タクときまつて居る。質素な母はもとより圓タクの散在だに知らぬであらう。その子の心配孫の安否を氣遣ふ一念は、野越え山越えの難行も苦にはならぬのである。貴い親心の有難さを思つて私も幾度びか涙した。

三百里の遠きに離れて居る私は、益暮の見舞はおろか、時折の文の通ひすら怠り勝ちである。生れて三十有餘年の今日まで、孝行らしい孝行など一度もした事はない。その扶養のつとめを始め、一切は家兄がその責に任じて居る。次男に生れたとは云へ、餘りにも粗略疎遠がひどいと自分で、たまに恥ぢ入る時もある。その私を責むる事すらししないでこの有様、まことに親なればこそである。

母は全く自ら「無知文盲」を以て任じて居るのである。日蓮の信者ではあるが、愚禿親鸞と云つたやうな氣持をば、教へられるともなく、自ら體して居る。女中の着物でも自分でたゝんでやつたり、出かける時には女中にも坐つて「行つて参ります」と云ふ程の人である。

「人もし右のほゝを打たば左のほゝを出せ」と云ふ言葉通りに行く人である。母は性來勝氣で而も徹頭徹尾服従の人であつた。そして不平一言云ふやうな母ではなかつた。この母であつた

ればこそ、よく私の父の配偶者たる事が出来たのだと私はいつもさう思ふ。どんなに着物を作つて上げても、勿體ないと云つてはきたないのを平然と着てゐる。いつも粗衣粗食に甘んじて何の屈托もない。私にもし宗教心が何處かあるならば、それはたしかにこの母の賜である。せめて東京に在る間、安んじさせねばと思ひながら、それすら心のまゝにならぬ。

### 子を思ひ親に謝す

坊やが昨日から珍らしく熱が出て居る。家の者達は病院に行つて見やうかなどと騒いで居る。ちやうどこの三十一日でまる二つになるのだが、一度も患つた事はない。何でも一度だか少し熱があつたが、すぐ直つて了つた。そんな譯で、今度も大した事はないだらう。概して健康は恵まれて居る方である。だいいち普通の肉體が與へられて居るのが、どんなに恩寵だか分らない、と日頃は感謝して居る。もし之が一寸でも缺陷があつたとしたら、親としていか許り苦勞なものであらう。それに智能の方も先づ、人普みのものは兎も角授けられて居るやうだ。それであつたら全く感謝して良い譯である。

親とならない前に、私は一度だつて自分の子が愆しいと思つた事はない。また生れて後も心から、嬉しいと思つた事もない。この處普通の父の心理と違ふやうである。けれど、可愛いと云ふ念も次第に深くなるやうだ。これからやがて開展し來るであらう彼の運命の數奇さと思つ

ては、獨りでに涙する事もある。併しどんなにしても、子のため美田を買はうなどとは毛頭思はない。又思つたつて出来もしない。が、最善最良の教育だけは與へたいと思ふ。私が最良の父であり、私の妻が最善の母であるとは、露思はれない。併し夫れは如何ともし難き運命である。で、能ふ限りの良き教育の外には出でまい。未だに人としての徳足らず、時に奔馬の如き本性を出さんする私である。併し、父であるとの意識は冷靜なる我に歸らしめる。この小さき子に依つて、どんなに教育されるか分らない。家庭を以て、人倫の第一歩だと教へた先哲の言葉に、深い意味が見出される。

X X X

くにの母は先月から私のうちで生活して居る。自分で一文不知の徒と知つて居る母は、黙々として何も語らない。粗衣粗食を無上のたまものと喜ぶ母である。この世のなかで私を偉いと思つて呉れる人は、勿論一人もない。又ある筈もない。が、私の母だけは、さう信じて居るらしい。子として與へられたる以上、さう信ずるより外にはないと思ふのであらう。信じられるだけ、私はおそろしい氣がするのである。何にしても老人は有難いものだ。何となう家に重みをつけるやうである。又母の好きな大阪の文樂が演舞場にかゝつて居る。學校が休みになつたら、一緒に見に行つて、せめてもの孝行をさして貰はう。

思つて呉れる人は、勿論一人もない。又ある筈もない。が、私の母だけは、さう信じて居るらしい。子として與へられたる以上、さう信ずるより外にはないと思ふのであらう。信じられるだけ、私はおそろしい氣がするのである。何にしても老人は有難いものだ。何となう家に重みをつけるやうである。又母の好きな大阪の文樂が演舞場にかゝつて居る。學校が休みになつたら、一緒に見に行つて、せめてもの孝行をさして貰はう。

## 愛する眞に與ふ

眞よ

お前に書き残しておきたいと思つて某誌の上に、筆を執つたのは一年餘りも前の事であつた。その後毎月續けやうと思ひながらも、ついお流れになつて了つた。あれからお前はずいぶん大きくなつた。さうだ今年はもう五つだね。いま四ヶ月もたつと満四歳と云ふところだ。

あの頃にはまだ口もきけなかつたのに、近頃は何でも云へるやうになつた。せめて「お父うさん」だけでも口がきけたら、もつと可愛さの念もあらうものをと、愚痴さへこぼして居たのだが、僅か一年半足らずでこんなにも、のびて行くものか。ほんたうに驚いて了ふのだ。自分で話す許りでなく、よく私の云ふ事も聞き分けてくれる。これが無上に私には有難いものだ。

眞よ

大抵の人は子供が欲しい々々と云ふものだ。でもね、何もかも打あけて了ふが、お前がまだ生れ

ない前に、一度だつて私はそんな事を思つた事がなかつた。だと云つて生れる時には生れるものだ。さうした父をもつて生れたお前が、幸福であるとは夢思はなかつた。それ許りか、お前の前途に横つて居る暗い影を思ふて、幾度か私は人知れず泣いたか分らない。敷奇な定めの人としてお前を生みつけた私をば、自ら責めないで居られなかつた。お前に最善の教育を與へやうと念じたものはそんな自責の思ひに出でたのだ。可愛さの心など、去年の夏頃まで露ほどもなかつた。父として妙な男もあるものと、顧みて自分でも不思議な位であつた。

ところがどうだらう、眞よ、さうした私であつたのに、次第にとお前の可愛さが思はれてならぬのだ。先頃も深夜深い眠りに落ちて居た私はひどい地震に驚かされて目が覺めた。いやびつくりして飛び起きた。起きるが早いか隣りの室に寝てゐるお前のとこに飛んで行つた。思つた程の大きなものでもなかつたので、ほつと我に返つたやうな次第。我を忘れて先づお前のところに駆けつけた私にはやはり争はれない親の愛があつた。こんな本能的な愛に恥しさと又喜びとを感じるのであつた。

眞よ



こんなにまで私のお前に對する氣持は變つて來た。お前が私を慕ふ姿の切なる見ては、又思ひはこまやかになつて來るのだ。殊にお前の言葉や傾向などに私の姿を見出されるにつけ、私はたまらない氣持になつて來る、お前はまるで私の鏡みたいなものだ。全く恐ろしい事だ。私の行ひを夢おろそかにしてはならぬ。これで私がお前を教育してると云ふよりも、お前から却つて教育されるやうなものである。シエークスピアが「子供は大人の父なり」と云つたが、むしろ「子供は親の教師なり」と云ふ事になつて來る。お前の教育を受けて私も、もつと大きな人となつて行きたい。お前も、どうかほんとうに偉い人になつて呉れ。それは凡ての親達の子に對する願ひのだが、心からそのみを私は祈つて居る。

もつと書きたいが、又の機會を待つとしやう。では

眞よ

## 子 病 む

子供が病氣だと云ふ手紙を受取つたのは、長崎の宿でだつた。日頃健康なたちなので、大した事もないだらうと思つて居た。京都や奈良あたりで旅の日數を重ねるにつけ、さすがに氣になり出すのであつた。そんなこんなで豫定を少し早めて急いで歸つて見ると、案外重患だつたのに驚いた。と云つても別に命且夕に迫ると云ふのではないが、右の腕と左の足がまるで利かないのである。もう二週間近くもかうして寝込んだまゝなので、さすがにやつれ果てゝ居る始末、こんならもつと早く歸つて來なければならなかつたのに濟まない事をしたと思ふのだつた。

でも苦痛はそんなにないらしく、本人は割に平靜で、朗かさうな有様なので、少しは私もほつとするのである。醫者は容易ならぬ事だと云つて、一刻も早く私に遭ひ度いと云つてゐるらしい。翌くる日は何やかと事務に追はれて、とつ／＼病院を訪ふ時間がなかつた。やつと一昨日早朝かけつけて見るといかに心配した面持ちだ。却つて私が恐縮するやうな有様だつた。聞

けば小兒痲痺だと云ふのださうな。一種の脊髓炎で、脊髓に炎症を起して、運動神経を壓迫する。その部分が利かないのだと云ふ。それが傳染性のものでそれも極めて稀有な病で、一人の醫師が一年に五名位しかこの種の患者に接しないとやら。これは又何とした病氣に取付かれたものだらう。よく／＼の事だと思ふ。さうまで私は呪はれて居たのか知ら。醫者と云ふのは、私の友人で、N大學の醫科の小兒科長をつとめて居るN博士である。獨逸留學以來の仲ではあるし、親切に扱つて呉れて居るのは云ふまでもない。

博士の云ふところに依ると今一週間も経つてから、電氣をかけねばならぬ。尠くも一日二度は電氣療法をやらずばなるまい、さうすると、通院ではいけない、入院する必要があるがどうだと云ふ。これは愈々大變な事になつたものだ。今まで私は勿論、私のうちから入院患者を出した事はないのに、客易ならぬ事態である。併し何にしても醫師の云ふ通りにする外はない。絶對服従である。

さうやつて電氣をかけて見たにしても、きつと全癒するとは決まらない。どれ程効果的であるかは豫め保證は出来ない。痲痺が残つた部分は一生利かないで終る譯で、結局不具者となる他はないであらう。さうなれば勢ひ將來の職業に關係して来る。一生の職業問題が病氣に依つて左右されると云へば、愈々事は簡單でない。呑氣な私も暗い氣持にもなるし、その不憫さと思へば堪へ難くなつて来る。生命は取止めるにしても、この病氣が殆んど運命的のものでさへある。そんな大きな事件が一寸した旅の間に起きて居やうなどどうして思つたであらうか。

何にしてもよろしく頼んで、N博士の病院を辭去した。歸りの圓タクのなかで私は思ふのである。仰々樂天的な私は、之でもN博士のいふ通り、前途を悲觀したり案じ廻はしたりする事は出来ないのであつた。どうしてもよくなると思ふのである。一時の氣休めかも知れないが、私にはさう思へて仕方がない。一寸憂鬱にはなつたが、又すぐに元の朗かさを取もどして家に歸るのだつた。

醫者の學問的基礎に立つて言葉や、その診察に對して、もとより我等素人たるもの何一つ言葉を容れる事は出来ない。併し醫師には患部、乃至は病める現象許りを見て、生きんとする人間の意志や力を閑却する傾きがないであらうか。平素から私は思ふのだが、人間は原則として健康であるべき筈だ。病氣するのが間違つて居る。萬一病氣したとしても、放つておいたつ

て、きつと全快するものなのだ。平癒するやうになつて居る。かく平癒せしむるものが即ち「癒さんとする意志」ではないか。だから私から見れば、病氣は精神の間隙である。心のすきである。

ところで天理教に於て説かれるところに依ると、子供の十五までの病氣は親のきづだとか言ふのである。して見れば何かしら私自身の不徳の現はれではないのか。私に反省を促がす神の御意見ではないのか知らと思ふて見る。すると今更のやうに精神生活の上にシヨツクが感じられる。そんなに思ひ廻しながら何時の間にか家に歸つて來ると、福岡のT氏が丹波市のI君と一緒に訪ねて來て呉れたのだつた。

T氏は天理教で今一番の人氣者なのだ。その白熱的信仰、とその筆とその雄辯とが教内の人氣を沸騰せしめて居るのだ。誌上や噂の上では互に知つては居ながら、相遭ふの機會がなかつた。先達私が福岡で放送した夜、氏は私の宿を訪ねて來て呉れた。三十路を出づる事漸く五年の少壯宗家である。氏自身の信徒だと云ふ支那料理中華樓に案内された。折柄來訪中だつた九大の田中君も一緒だつたので麥酒を飲んだりして居ると、十一時を廻つた。夜半一時三十分の

私の發車まではまだ、二時間許りもあるから、市内をドライブしやうと云ふ事になつた。

箱崎や千代の松原などは申すに及ばず、さては名島や東公園など、飛ばして行くと、時の經つのも忘れて了ふのである。斯うして歩いて見ると、福岡、博多は名勝舊跡數多しだ。殊に涼夜のドライブは何だか映畫劇めいて面白い。車を飛ばしながら、ぼつり／＼話すのも興が多かつた。天理教ではお助け／＼と云ふが、私はお助けはしない事にして居る。頻死の病人のところに付てお助けするよりも、かかる重態になつた事それ自身が何よりも感謝だと云ふ事を傳へて感謝せしめるのだ。それが又不思議に効果的だと氏は云ふのである。この言葉がいたく私の琴線にふれた。

それから十年の知己になつたやうな氣持で別れたのだつた。そのT氏が、今私の宅を訪れたのだ。子供の病に就て何と氏は云ふであらう。私の興味はそこにながれた。

お助けを取次がないといふ氏であつても、やはり天理教特有の因縁の理を説くのである。氏に依れば、痲痺して動かないといふのは制へられて居る形だ。伸びんとするのに伸ばさない姿だといふ。之は親たる私が何かしら他を壓へて來はしなかつたか。今では哲學なんかの教養の結果

すいぶん寛大でもあるだらうが本質的には神経質で、他に對して假借するなく論難するくせがあつたのではないか、と、斯う氏は尋ねるのである。

なる程今では出来るだけ、氣の長いやうに努めて居る。出来るだけ小言も云はないやうに、無暗と小さい事にこだわらぬやうに心懸けて居る。でも生付きとしては全くお言葉通りだ。さう努めて居るにしても、併し今迄の因縁を絶ちきるまでの徳は積んで居ないだらうと指摘されるれば、之又文句の出づべき筈もない。恐れ入つて引下る許りである。それだ、その處だと、氏は説くのである。

いかにもと肯けはしても、ここにも亦疑問は無論存する。だいいち道德的生活や品性が直に生理現象にかうまでも必然の因果作用があるとは、一體いかにして可能であるか。私にはどうしても解き兼ねる謎であつた。今T氏の説く事は尤ものところがあると肯かれるとしても、因果の理法の説明は到底私には納得出来ない。牽強附會の説としか受取れない。かゝる説き方に依つて、お道では幾多の人の病氣も癒しただらうし、又道德生活の實踐に活ける強制力をもち得たであらうが、それは只結果でしかあり得ないのではないか。

かと云つて私は今私の不徳を辯護しやうとは夢思はない。自分では餘程自らを制へて居る積りであるし、人に接するに寛容で、且つ謙遜にと精一杯努力はして居るものゝ、心中に巢喰ふ傲岸な氣持は自ら外に現はれるに違ひあるまい。意識しない裡に他をいぢめて居る事も勘ぐらないであらう。よくよく心しなければと思ふのである。どちらにしても、T氏が云ふやうに子供は自分の分身であり、延長であり、否自分自らでさへある。その患ひは私自らの憐みである、いかに悩みあらうとて、併し不平や愚痴や恨みを云はうなどの氣はさらさらしない。

斯うして改めて自分の道德生活をふり返つて眺めて見るやうな機會を與へられたのは、誠に尊い恩寵である。萬が一にでも醫師N博士が恐れるやうに不具者になつたとしても、呪ひもすまい、恨らみも云ふまいと覺悟して居る。それであつても猶且つ感謝するだけの餘裕と心境を持たせてもらひ度い。ベートヴェンは耳が聞えなくても猶作曲したではないか。エレン・カイだつたかは、あらゆる不具を一身にせ負ひながら偉大なる仕事をしたではないか。私は子供のふびんを悲しみながら、出来る限りの奉仕を捧げ度い。子を生むものゝ責任がいか許り大きいものかを、やつと知つて來たのだから、いかに愛し得るかを試めして見やうではないか。

子供は私が出発する時から土産に蓄音器を買つて呉れと云つて居た。今迄はラヂオでお茶を濁して居たのだが、子供の時間が短いので、それで満足し切れなくなつたらしい。私自身がうちに居てレコードを樂しむやうな時間もないので、つひこれ迄手が出なかつた。買ふと成ると良い加減なものも買ひ度くないし、さう簡單にも參らない。まあ待つといで、いつか買つて上げるから、と片付けて出て行つたものだ。

さて留守の間に斯うして病氣になると、本人が短氣になるし、我儘は云ふし、蓄音器々々と云つて仕方がなかつたさうな。さもありつらんだ。と、いかなはないで、近所知人のところから借りて間に合せたと云ふ。そこでも子供のために買つてあるものを、いつまでも放つてはおけない。と云つて意の如きものを買ひ整へるに足るだけの餘裕が、實云ふとないのである。平素の心懸けが良いと、その位ひのものは譯はない筈である。そこがその豫ねての身持が悪いから毎月々々精一杯の有様で、いざ鎌倉と云ふ場合に動きはとれない。自らかこつて見ても追付く譯もないのである。

幸ひの事に銀座のY樂器店は、親しい間柄ではあるし、電話一本ですぐ、どんなものでも持つて来て呉れるし、いくらでも持つて来てくれるのだ。ところが今年の春、私に對して、その店が顔を立て、呉れたのだが、今だに義理を缺いて居る。その手前景氣よく頼むのに氣がひけるのである。

こんな場面にぶつかつて、始めて金の偉大さを知るのである。平素の心懸けが大事だと思ひ知るのだ。だから自分で行くのも嫌だし、青年達をやつて見たが、らちがあかない。そこで今日は終日原稿書きといふ禁を破つて自ら出かけた。マダムに會つて斯々だからと嘆願すると、もとより一議に及ばず話は分つた。どうせ圓タクでお歸りだらうから、乗つて入らつしやいといふ。願つたり、協つたりで、童謡十數枚と、義太夫十數枚とを併せ持ち歸つたやうな次第だつた。童謡は勿論子供のため、義太夫は老母への土産のつもりだ。

斯くて始めて蓄音器がうちのものになつた譯だが、まあ大變な事だつた。それにしても蓄音器やレコードの流行といふか、大衆性といふものは大したものだと、今更感心した事だつた。ジャズリズムが資本主義と提携して讀書が普遍化した。今度はキャビタリズムと握手して、全國が音樂化されやうとして居るのだ。ゑらい事だ。「島の娘」も勝太郎もその時の潮に乗つ

たものである。かうなるとキヤビタリズムも相當文化運搬者の役割を演じて居るらしい。私とこの子供など音楽家となるべき素質は全くないが、こんなにして音楽に對する理解を今の内から持たせておくのは、決して悪くはあるまい。むしろ私は感謝したいものだ。

## 母のこと

もとく母は國に居る兄のもとで晩年を送る筈なのであるのだが、私のとこの孫の面倒のためにはるばる來て貰つて居るのだから、もとより何の遠慮も要らう道理はない。それでも氣兼ねがあるかして、小さくなつて小言一つ云はれないが、母の頭痛の種となつて居ることが一つある。他でもない。私の獨身生活である。一昨年あたりから昨年にかけて直接ではあるが、遠慮がちにやかましく云つたものだ。『來年は厄だから何とか早くきまりをつけたらどうだ』と談じこまれたものだ。これには私も弱つた。今年になると自分一人では、とても手に負へないと思つたものか、遠縁の誰彼とか、近所の夫人なんか頼んでの強意見、返事のしやうもない。年頃の娘さんではあるまいし、獨身主義を標榜する譯でもなし、勿論すねての事でもない。何しろ結婚生活に就ては近著にも卒直に書いて居る通り相當の失敗者だし、今更敢然と嫁探し

もないものだ。先様だとして警戒第一で、我こそ救済してやらうとの菩提心を起す向も先づ望まれまい。そんなこんなで日はだん／＼に経つて行く。かと云つてあせつても仕方がない。何にせよ、あなたまかせの年のくれた。枯木に花咲く時節もあるだらうし、私に春の廻り来る日が、萬更ないでもあるまい。「母よ思ふなかれ」だ。こんな事書くと變のやうでもあるが、書かないで居るのも、亦氣取りのやうだし、どうせ私のことだ。何も彼もさつくばらんを書いて了はう。

大體、浮世の様は、あんまり案じ廻はすものではない事だ。心したつて始まらないんだ。兎も角私の身邊をかうざつと眺めて見ての話しだ、くよくよ屈託する人間に限つて浮ばないやうだ。自分の俸給が悪いのだ、一向に待遇が振はないと云つた風に不平不満をこぼして、他人の収入の高や、地位ばかりを氣にして暮す人がある。このやうな類の人に對して、前途の望みをつなぐ事は、斷然出来ない。呷つたり嘆いたりする際があつたら、どし／＼働いたら良いではないか。収入が少なくて困るなら、かせいだら良からう。それが其ブルジョアの考へ方なんだ、とプロレタリアートは猛烈反對するであらう。だがこゝで喧嘩口論しても始まらない。何にせよ、近頃痛切なる實感である。いろ／＼案じ廻はして居た日には、私なんか一日だつて

生きて居られない。

近頃私の母がめつきり弱つて來た。もう相當な齡なので、老衰を見せるのは無理もないんだが、眼に見えての弱り方である。口を利くのすらも大儀さうで氣に懸る。もしもの事があるのではないかとさへ時々思はれないでもない。それにつけても思ひ出でられるのは、父の死である。父が亡くなつたのは、私がまだ大學の學窓に居る頃だつた。當時私は激しい壓世病にとらはれ自殺を企てて居たものだ。それも併し果し得ないで自分のふがひなさに、ひどく失望して居る折であつた。男の五々の齡と云へば、厄と云ふので、今にも死の神が自分に襲つて來るのでないかと云つたやうな豫感に自分で襲はれて居るやうな格好だつた。自分で命を絶てない口惜しさから、むしろ死を待望して居る有様であつた。

斯う云ふ時分に父が死んだ。何んだか父が私の身代りになつた様にさへ思はれるのだつた。母の健康状態と、ちやうど又今年が私の厄年だと云ふので、彼は思ひ合はしてつまらない豫感に苦しめられる次第なのである。早寝早起が慣はしとなつて居る母は、元來極めてたつしやな方なのである。冬の夜なんか、私は湯たんぼなしでは一時も休まれないのに、母は一向に用ひる

事を知らない。どんな嚴寒の候でも、水でしか洗面しないと云ふやうな健やかさである。大病を患つたのが、何でも私の十一二の頃であつたらうか。それ以來醫藥に親しんだ事は絶えてない。私が八つかそこくの時分であつたらう。鶏が鳴くか鳴かない頃、叩き起こされたものだ。まださめやらぬ頭に「何事ならん」と心配顔で居ると一緒にいて來いと云ふのである。その頃私達の住居する街から、四五里もあらうと云ふ山奥に、米の買出しがあつたらしい。私のうちは、すつと米穀の間屋であつた。女だてらにしり端折つてすたこらと山路をかち歩く姿を今髣髴して、往年の元氣さを懐しむのである。そればかりでない。よく朝は未明に起こされたものだ。きまつて八幡神社や清正公にお詣りするのである。私も青少年の頃は早起きだつたし、さして苦にもならなかつた。これは理窟なしに、私にとつてよき宗教々育であつたと云はねばならぬ。宗教々育と云へば近頃だいな世間の問題になつたやうだが、やたらに計劃的に騒いで見たつて仕方がないだらう。何の計劃なく、本然の姿を流露する處に感化があると云ふものだ。

## 母 逝 く

1

「湯たんぽを一寸貸して下さい」

と云ふ人の聲にはつと驚かされて眼を醒ました。一月十七日の未明である。

「どうしたと云ふんだい？」

「おばあさんの手足が冷えて仕様がないうんです」

この言葉を聞いて、身がきりつと引しまるのを覺えた。寢ては居られない。がばとはね起きて母の病室に飛んで行つた。電氣は煌々と點つて居る。鐵瓶のゆげも切りに立つて居る。大きな酸素吸入器が枕頭にある。この吸入器で、母はやつと呼吸してゐるやうな有様。昨夜看護婦とY子とは一睡もしなかつたらしい。濟まなかつたと云ふ氣持で一杯になつた。母の顔を一目



見るなり

「やあ之は良けなり」

と直覺しながら、私はがっかりして獨り太息をつくのだった。母と呼んで見ても、眼を見開くだけで返事がない。急いで甥や子供や女中を起こさした。

主治醫の關口教授が駆けつけて呉れたのは夜が明けて間もない頃だった。更に佐藤博士も急いで来て貰ふやうに電話した。刻々病勢が昂進して行くのが、素人眼にもはつきり判るのである。カンフル注射や食鹽注射など主治醫看護婦の種々の手當を私は只黙々と見守るの他はない。いいんとした沈痛な空氣が室に漲つて居る。

— 36 —

この正月の休みに實は早々から私は海濱に出かけて居た。一寸仕事が一しきり済んだ六日の夕べ、新しい材料を取るべく家路に就いた。それも驛につくなり、明治座の芝居を覗くなどして歸宅したので、愈々うちに着いたのは、かなり晚かつた。母の患ひなど夢思ふ事もなかつた。

書齋の机の前に座するもあえない内に、家人から聞くと昨日風呂場で母が卒倒したと云ふの

だ。それも錢湯の流しで轉ろげたんださうな。元來母は入浴が私のやうに好きである。殊に錢湯を好んで居た。私の留守になると良く出かけたものらしい。それが私は嫌ひだった。何も態々街の湯に行かなくも、家で沸かさすれば良いものをと、私は腹立たしい迄に思ふのであつたところがずつと後になつて聞いた事だが、老人はなべてあら湯を好まない。と云ふのは、あら湯は刺戟がひどいのださうな。街の湯にはあかが溜つて刺戟がやんわりと來るらしい。錢湯に出かけるのも讀める譯である。

ならば是非もないから、誰ぞ一人はきつと連れて行きなさい、と云ひ々々私はしたものだ。女中達にもきつくその旨を云つておいた。だのに昨日は一人出かけてこの始末。どこかの夫人が知らして來て呉れたので、一人留守居をして居たHが飛んで行つて連れ歸つたと云ふのである。それから熱が嵩じて床に就いて居る有様である。早速醫師の來診を乞はうにも、夜は遅いし、明日にしようと思つて就寝した。

ところが四十年來母は醫藥を飲んだ事がない。一寸體に異常があると、針や灸療治をやつて貰らふと、大抵良いのだつた。今度はいつもの工合と違がふから、醫師の診斷を仰がうかと云

— 37 —

つても、頭として聞かない。仕方がないので、針灸醫を頼んで來ると、この様子では醫師の許しを得なければ、手が付けられないと云ふのである。やつとの思ひで來診を乞ふことになつたその診断によると胃縮腎の持病があるところに流感に侵かされて、少し肺炎の氣味だとの事だ。こんな有様で發病後十日許り経過した。その間一進一退で少しも樂觀を許されないものがあつた。だが先づまさかの事もあるまいし、こん度の事は何だか大丈夫のやうにも思はれた。併し何しろとしが歳だからとの不安も切りに募つて來るのだつた。

それに擔ぐ譯ではないが、どうも歳廻りが悪いのである。と云ふのは去年が私の厄年に當る二十五の厄の頃は自分が死さうでならぬ氣持に襲はれて居たものだ。私の死が免がれた代りに父がなくなつた。往年のやうには寄る年波の所爲か、さすがに死の不安などは覺えなかつた。母は併し大變それを氣にして居た。だがもし此の人間に於ける厄なるものが、不幸、不運や禍と云ふやうなものを意味するなら、私などは年から年中不運の連続と云つて良い。何しろ惡戰苦闘のフィルム見たいなのが、私などの生活だ。ならばこの上の厄もないだらう、と云ふのが私の思ひだつた。かう良い加減にあしらつて居たものゝさて斯うして母が病床に寝こんで見

ると、何かしら暗い豫感が、思はない時に、そつと忍び込んで居るのを見出すのだ。我ながら愕然としたこと一再に止らない。

關口教授の扱ひがよかつた故か、佐藤博士に來て貰つた頃には、一寸見直して居た。とは云へ絶望八分で、ただ一縷の望みが期待され得るのみだつた。所詮見込はないものとしても、ここ二三日間は、心配の事はあるまい。午後からでも郷里に打電しておいたら、臨終の間に合ふだらうとの事だつた。兩氏とも學校の講義があるからと言ふので、一緒に駿河臺へ自働車を飛ばされた。本部では午後五時から、振興委員會議があるから、その席で佐藤博士とは又會はうと約した。關口教授は三時まで講義があるから、終り次第來診するとの話しだつた。

ほつとして見たものゝ、不安なりし豫感が、偶然ではなかつたさ知られるのである。何は兎もあれ重態の電報は國元へは打つておかねばなるまい。今まで手紙では簡單に病患である旨をば、家兄と本宅とは知らしておいた。それも心配しない程度に、風邪氣味だと言ふほどのこ

とで止めておいた。遙々の人達に、打案じて貰つても仕方がないと思つたからである。國に打電したり、市内に在る親類縁者に電話したりするうちに正午になつた。朝未明から茶一杯飲まなかつたのだが、覺食にも、さすがに、一碗の御飯が咽喉につかへて、腹に通らなかつた。このひる御飯の最中に呼ばれて病室に入つて見ると、もう母は昆睡状態に陥つて居る。呼べど呼べど詮はない。即刻危篤の報を方々に飛ばさしめた。講義をして關口教授が來られた時分には、もう息は絶えて居た。國のもの達はもちろん市に在る人々もいまわの際に遭へなかつた時に一時十五分である。母は七十一の齡をもつて遂に永い眠に就いた。只一人残されてゐた私の親も、かくて奪はれて了つた。

二時となり三時となり四時となつて、次第に友人先輩同僚の諸氏が、弔問の爲めに駆けつけられた。夕方には佐藤圓谷兩氏の指揮のもとに、種々な委員が擧げられた。かくて先づなきがらを奥の座敷に安置してからは、一切の事務は、凡て之等の諸氏からどん／＼進行されるのだつた。その夜とあくる日の夜とお通夜で荒れ切つて居る、私の家も種々の人達に依つて埋められた。越えて十九日の告別式當日の朝、九時に國元から兄と本家の従兄とが着いた。齋場の

告別式が終つて、落合の火葬場で母のなきがらは遺骨と化するのだつた。高安大教會の杉村會長の好意と本所なる東本分教會の中川會長の誠實とに依つて始終のみこ式が営まれたのは故人の大きな慰めであつた。かくて兎も角凡ては滞りなく済んだ。野邊の送りは私なんどの分に過ぎる迄のものでつた。と言ふのも全く學校のおかげである。否學校の先輩同僚の情である。私の喜びよりも人の良い母がどんなにか、草葉の蔭から感謝して居るであらう。何の孝養とては事實のところ果しえなかつたが、この友人先輩の厚い友情を受けて、辛うじて、子としての務を完ふするを得たやうな始末であつた。

斯やうな萬一の場合に對する用意が、種々な意味に於て、私に在る筈はないのだ。夜半眠られない時などは、私のやうな者でもまさかの時を考へ及んで、哀別離苦もさることながら、現實の問題をば、どう處置すれば良いものかと案ぜられて、暗然となるのだつた。それでも今更どうする事も出来ない私であつた。それがたう／＼その時が來てしまつた。もとより途方に暮れ果てて、私密かに人知れず密葬にでも附して郷里に遺骨を持ち歸らうかなどと、迄考へて見た事もある。亡命の客のやうな姿では、第一亡き母にも濟まないし、そんな乞食見たいな事が

今の立場として出来る筋でもない。だが、わが現實の狀勢をいかにせんだ。と言ふやうな次第で、兎やせん角やせんと、みじめにも思ひ煩らふのだつた。ところが、その場面に打突つて見ると、思ひも設けぬ人々の情である。その情の露もて、勿體なきまでの野邊の送りを濟まさしてもらう事が出来た。

3

母が上京したのは、昭和四年の春だつた。子供の面倒を見て貰らうために、むしろその上京を乞ひ求めたのだつた。爾來今日に及んだものだ。一子眞はこの母なき母の手に依つて育て上げられた。生みの母を知らない眞は八才の今日まで、その祖母の愛のみが唯一のものだつた。孫をはぐくむのは、私の母にとつて大きな楽しみの一つではあつたらしいが、暑いにつけ寒いにつけ、どんなに胸心矢の如きものがあつたであらう。私達こそ東京に居れば不便不自由はないが、母にして見れば、慣れぬ都の生活は決して好もしいものではなかつた。むしろ苦痛と思はれるやうだつた。二年三年たつと、それが眠に見えて體に應えて來た。でも我慢強い母は

「歸り度い」などと、ひとことだつて洩したことはなかつた。

我慢強いのは、いかにも母の最上の美德であつた。我慢強い父に仕えて何の風波も家庭に起らなかつたのは、全く母の忍従の徳に依るものであつた。「お言葉無理とは思へども」と思ひつゝも、黙々と従ふのが母の常であつた。これでは喧嘩になりやう筈がない。女大學の三従の道徳を實踐したといふよりも、母のは、むしろその性情から來て居るやうに思はれた。どんな事があつても父に向つて、

「だつてあなた」

などいつて、たて突いたのを聞かない。父の言葉は母にとつて、絶對無上の命令であつた。勿論これは夫を操縦すべき政策でも、手練でもなかつた。只無性に父を尊信する母であつた。この點父の幸福でもあつたに違ひないが、信じ得る母も恵まれたものである。

私が中學を出るまで、何もかも父に對して絶對服従であつたのは斯うした母の影響であつたと思ふ。かと云つて、私は素直な従順の美德をもつたものとは思はれない。愈々青年となり個性がはつきりして來て見ると、かなり昔日の像とは異なるものであるやうで、顧みて微笑する事

である。でも母の性質たる我慢強さは、どこか残つて居るやうに考へられる。逆境に處して頑張る氣力は母に依つて教へられて居るところではないか知ら。でも私が、強固な意志の持主とは思はれない。私に於ける頑張りとは、何ちらかといへば、意地張といふものだらう。

晩年の數年はかう私のもとに在たのだが、それとて先きにいつたやうに、私の孝養からではなかつた。私自身の都合のためだつた。かなり功利論的な動機からである。カントの道德學說を待つまでもなく、孝行だとは思はない。動機は何にしたところで。日常の生活の實際を語れば、更にひどいのだ。生活の不安や家計の不如意を訴へて、心痛せしめるやうな事はなかつたにしても、優しい言葉だにもかけた事は、實のところないのである。これは主婦が居なくて男世帯な所爲もあつたらう。従つて嫁に對する氣兼ね苦勞は母にはなかつた譯だ。夫れにしてもちつとも優しいさのない無遠慮な私の言動は、どんなにか嫌やな思ひをさせた事だらう。例へば私が外出しやうとする。空模様が悪い。

「空が怪しいから傘をもつて出たらどうだ」

と母はいふ。處が私は傘をもつのが、大嫌ひなのだ。

「いや良いです」

と、濟まないと思ひながらも、突けんどんに斷つてしまふのである。こんな折に、若しかほかの人から注意されるのだつたら、例へ嫌と思ひつつも辭せない私でありながら、母であるとき出しに、すばく言つて顧みない。

それが母にとつては何許りとげとけしく聞えたらう。例の再婚問題にしろ、すつと母では氣になり通したらしかつた。二度や三度はこは々ながら私に伺ひを立てるやうな有様だつた。母の心配をおもひ遣りながらも、いつも小使が大臣に伺ひを立てた時のやうに、にべもない挨拶である。他に親身になつて相談するところはなし、放つておく譯には行かないし、ほとほと持て餘した様子はありありと眼に見えるのつた。

こんな次第だから同じ家に居るものの、同じ電車に乗り合せたより、まだ淺間しかつた。私にして見れば母の前で藝術や哲學を論ずるでもなからう。學校の事を語つても興味はありさうにもおもへない。母にすると國の噂でもするより他はない。となると、國を離れて廿幾年の私には一向面白くないのだ。結局子供の事より以外には話題がないのである。それに私は寢坊で

夜深しだから、生活が母とはまるで逆なので、日曜は日曜で來客のため終日時間がとられると  
いつた風で、おちおち語る時もないし、顔を合せる事すら珍しい有様だった。かうして全く孤  
獨寂寥の心もて逝かした事は、何を以てわびやうか。

今一つ忘れられない不孝の罪がある。

最後の病床に母がある間その看護は看護婦と姪のY子とが當るのだつた。最初の間は朝晩枕頭  
に尋ねたものの、次第に私の足が遠のいたものだ。胸中にもしや々と極度の不安に襲はれ  
ながら、私の足は、兎角漕り勝だつた。それを見兼ねたのか甥のHは

「ちつとも來もしない。けしからん奴だとお婆さんおこつて居ましたよ」

といつたものである。さすが顔を赤らめる外なかつた。併し實に間を隔て、夜苦しさを  
ききながら、暗闇たる四邊を顧みて獨り泣いて居る私であつたのだ。いかに不安なればとて誰と  
て相談相手はないのだ。甥が居、姪が居やうとまだ子供にすぎない。相談などの役に立つ年格  
好でもない。今更言ひ譯がましいが、私は衰へ行く母の姿を見るに忍びなかつたのだ。だとして  
それが何の遁辭にならう。母の叱りも尤もだ。いかに不孝だとは言ひ條、こんな思ひをさせた

事は一度もなかつたのに、臨終にこの心もて逝かしたものは、子として誠に萬死に償する。愈  
愈息をひき取る際に甥の兄妹はわつと泣いて

「おばあさん國で死なせたかつた」

と聲をはり擧げた。この前後に當つて、私に對し何たる痛捧であらう。この言葉は、孝養足り  
なかつた私に對する彼等の鞭として、永久に私の耳朶に残る。

何にせよ、母は既にないのだ。何を以てわが罪を謝さう。

旅  
日  
記

## ライン 徒然草

私に於ける、外遊二年の旅にしてからが、もとより漂泊の氣持であつた。その旅の杖はあらかた歐羅巴の町にひかれたが、私の専攻する學問の性質上、主として獨逸が中心であつたのは云ふまでもない。そこで少し獨逸の旅を思ひ出して見度い。

先づ思ひ出さるるはラインの河下りだ。ライン河は云ふまでもなく、獨逸と佛蘭西の境を流れる大河だ。これらの國々に旅したものはきつと一度はこの河を上り下りしたのであらう。私もその例に漏れなかつたが、結局失望の外なかつた。元來私は河に船を浮べるのは好きなので、わが國の河で、面白さうなのは皆下つたものだ。京都嵐山の前を流れて居る保津川や山城宇治の川を始めとし、甲斐國なる富士川、九州肥後國球摩川などは千變萬化の味があつて面白かつた。別けても富士川と來ては名にし負ふ急流で非常な危険さへ伴つて居たものだ。危険だと聞いて



川瀬の岩に打たれて死ぬのも興があると思つて出かけるのであつた。「我死なばならびが岡の花のもと」、と云つた氣持を實踐した譯だつた。ところがラインと來たらまるでつまらない。川の廣さは大したものだが、廣い許りで一向面白くないんだ。兩岸の風物もまことに單調を極めたものである。尤も詩人ハイネが歌つた。

風清く 夕やみ 迫る頃

ラインの川 靜かに 流れ

峰の頂き 夕映へに 色づきぬ

といふやうな句だけを聞けば一寸よささうなのだが、詩情乏しいせいか、私にはそんな詩興が起こらないのだ。當時の日記を随分さがして見たのだが、一行すら書き残して居ないところを見ると、餘程つまらないものであつたらしい。右のハイネの歌は有名なローレライの一句である。元來このローレライと云ふのは、ライン河にまつはる傳説の一つである。所謂風清く流れ靜かなる夕べともなれば、ラインの河沿ひの岩の上に、みめ美しい若き女性が坐して居る。身を飾る寶玉もあでやかに、眼をあざむく許り。黄金なす髪を梳つて居るではないか。而

も天來の聲かと思はれる妙音で歌ひながらくしけづるのである。ところがこの岩の邊りは昔から、暗礁だ魔の淵だと傳へられて居る。だがかちとる船人たちはその世にも類なき姿を眺め、妙なるひびきを聞いては只茫然自失して終う。暗礁も打忘れ、魔の淵もものかわと、ひたすらに岩上を見上げる許りである。かくて船人はその舟諸共に悉くその影も見せない。もとよりローレライの惱しき調べのためだといはれる。それだから、

ゆらのとを渡る船人かちを絶え

行方も知らぬ戀の道かな

と云ふのは獨り日本許りではないらしい。ラインの流れはいかにもつまらないが、ローレライの歌には詩がある。ただしだ。ローレライは獨りラインの流れにのみあるのではない。

ラインの流れは、その一支流たるネツカー河と、マンハイム市で相會するのだ。この都市から一時間足らず汽車に乗つて、ネツカーに沿ふて走れば、ハイデルベルグなる古都に達する。このまちは河に臨んだネツカー・タールの一小都市だ。人口約五六萬位でもあらうか。が種々な意味でその名は全世界に響いて居る。第一景色が良いいんだ。獨逸中の最勝地である。佛蘭西

あたりから汽車の旅をして来る時分「何處に行く？」と問はれてハイデルベルグに行くと言つたら傍人をして垂噺せしむるに足るだけの魅力をもつて居るのも想像されやう。河の左右には岸近くガイスペルグとハイリーゲンベルグが聳えて居る。それらの峰々は所謂オーデンワルトの一部をなす。日本は海國でもあるが同時に山國でもあるので、山だの森だのと云つて、別段有難くもないが、獨逸あたりでは、それが珍しいのである。それに河をはさんで居ると來ては、名勝たる凡ての條件具はる譯で、美人にしたら色はくつきり白く、髪はからすのぬれば色と云つた格好だ。あまつさへ右岸のガイスペルグの中腹にはアルト・ハイデルベルグなる古城址が古き語り草の數々を秘めて建つてゐる。若し夫れ月明の夕、この城址に歩をうつせば、河沿ひの平野一面に展けて、このバーテン州の首都カールスルーエをはるか遠くに眺め得るであらう。「都鳥浮く大川に、夢多かりし我車かな」とある詩人の歌つたやうに、幾度かこの河のほとりに來て、私は旅愁を呷つた事であらう。と云ふのは獨り異郷に在るの悲しき許りではない。わが家庭が破壊されたとの悲報をこゝで受取らねばならなかつた。

なる程ゲーテもここに幾度びとなく訪ねたと傳へられて居る。始めて彼がハイデルベルグを

訪ねたのは、その二十六と云ふ青年の時代であつた。その友ドロテア・デルフのところに滯留したと云はれる。頃は獨逸文壇に於ける浪漫期文藝の絶頂たるスツルム・ウント・ドラング期に入らんとする時代であつた。一七七五年秋十一月四日彼はここからワイマール宮廷に向ふのだつた。このワイマールは彼の生涯に於て又獨逸文壇に於て忘れられない處であり、忘るべからざる時代であつた。彼の六十五才の最後の訪問まで、ここに杖をひき杖を止めた事は一再に止らず、又ここで物した詩歌も少くない。この詩聖をして斯くも繁々と訪はしめたハイデルベルグの景勝の程も偲ばれるであらう。

さうだ、詩聖の青春華かなる頃、獨逸の浪漫思潮は最盛期に在つた。いかに彼の青春の血潮に拍車をかけた事であらう。又時代のロマンチズムは彼の胸に油を注いだであらう。顧みれば又私の物心付く青年の頃こそ、日本に於ける自然主義凋落して、ネオロマンチズム盛りの時期であつたやうだ。然るに私の浪漫主義も滯歐を其境として、終りを告げたと云つて良い。今もその流れは一脈動かぬではないが、何と云つても色褪せた。年のせゐもあらうが、往時のロマンチストではなくなつた。すると私の海外への旅は、あだかも詩聖の伊太利旅行にも當る譯で

ある。彼の浪漫思潮はこの旅を契機として影をひそめ、古典主義が濃く彩られて来るのだつた。詩聖に自らをなぞらへるなど生意氣さにも程がある、と云はれるでもあらうけれど、個性に於ける自由さ奔放さなどに美を見出すよりも、形式美や古典に於ける儀統の美しさに目覺めて來たのも、私に於てこの旅からの事である。日本の歴史に對する發見や自覺も、かくて私に在つては極めて自然の成行であつた。カントよりヘーゲルに移つて行つたのも寧ろ必然の歸趨だつた。

無理にも學徒たるもの一度びは留學や在外研究員たらねばと云ふのではない。強ひて謳歌し讚美しやうなど露聊かと思はぬ。でも、かやうに過ぎし旅路のあとを振返つて見ると、獨逸の寒空に杖をひき、ライン河の廻りに冷き夢を見歩いたのも、強ちに無意味でなかつたと思はれる。

### 龍華寺詣で

清見寺の鐘の聲、清見湯の波の音、それはどんなに私の少年時代の空想をかつたか分らぬ。いかに私のおこがれの處だつたか知れない。云ふまでもなく、樗牛の文に依つて羨られたのであつた。彼はこゝで、「サツフヲの死や遅かりし」と云つては泣いたものである。又彼は「若きウエルテルの悲哀」を携へて來てここで涙にぬるるのであつた。その樗牛全集こそは、若き私の伴侶であつた。又となき慰めの友であつた。三保の松原を慕ひ、興津を思慕して己まなかつたのは、若うして逝けるこの哲人を偲ばむとの心に外ならなかつた。

ちやうど大正二年のことであつた。私は一高の友濱田と、二人相携へて都を出た。樗牛の眠れる龍華寺を訪はんだためである。彼がその晩年病を養つたと云ふ、興津の旅舎水口屋に一泊し

て、清水の奥なる龍華寺に志した。清水港に行くには、汽車は江尻驛で下車せねばならぬ。江尻から一見えに——の距離であらうか。正月の元日と云ふに、陽が今出た許りの處を、龍華寺の門についた。寺は草ぶきの古色蒼然たる建物で、後ろに山を負ふて居る。山の中腹に彼の墓がある。目を前面に放てば、一頃の田畑を距てて、折戸灣が深々入りこんで居る。その灣の對岸が即ち三保の松原續きである。折戸灣は更に清水の港となり、清見灣となり、駿河灣に連つて居る。薩陀峠や清見寺の山は指呼の間にあり、はるかに豆總の山々は雲かすみの裡に、陰見される。その山や峰を侍童の如く従へて、富士は白き冠を頂いて天女の姿を現はして居る。波絶えてなく、陽はうらゝに、世はあくまでも泰平にして、まことに天下の絶景である。思ふにこの風光は日本勝地の典型的のものであらう。繪にすれば、勿論油畫では良けない。南畫味でもない。夢の如く現の如きこの様は、倭繪でなければ現はされない。かゝるところをわが墳墓の地に相した梶牛は、まことに詩人の風格をもつてゐた人である。

この景趣を飽かずながめ乍ら聲自慢の濱田は、梶牛の「わが袖の記」などを朗々と誦したりした。こゝを辭し去つて、私達は羽衣の松へと急いだ。名に負ふ羽衣橋を渡るのも、愉快の一に

違ひなかつた。厚い朴齒の下駄を、からりころりと音立てさせながら、あの長い橋を渡つた喜びは、今以て忘れられない。之が縁となつて、後私は幾度もこのあたりに杖を曳いた。様々の意味で、こゝは私の精神生活にとつて、忘じ難きところとなつて了つた。今度の旅も一つはその追憶を辿らんとするためでもあつた。で、又も私は昨日龍華寺に梶牛の墓を訪ふた。濱田は今や伯林へ留學の旅にあれば、共に訪はむ道もない。だがこの地に見出せる若き友Yが伴侶となつてくれた。羽衣の松の邊に宿する今の私ではあるが、今度は渡るべき羽衣の橋は取はづされて居る。清水の開市と共に廢橋になつたとやら、便利や能率増進によつて、由緒も、傳統も歌枕も、ぶち壊はされて行く。さても文明の悲哀を思はずには居られない。

橋がないので發動機に乗つて清水の町を渡らねばならぬ。渡し舟のついた處から物の四十分も歩いたら、寺に達する事が出来る。空模様を氣遣つて出たのではあるが、寺につく頃には一シキリ降つて來た。昔の如く墓は靜かに眠つて居る。雨は増々降つて來る。だが煙雨靜かに降るのも、決して悪い味ではない。若き友は墓に刺戟されてか、切りに感激に満ちて、來し方行末を語る。しつぱりとして情趣極めて豊かであつた。雨で思はぬ趣きを味つた譯である。

樽牛の墓に詣つるにつけても思はるゝは、生前の彼の業績である。わが文化史上に残したその足跡である。獨り私と云はず、明治時代の人で、文藝、思想に興味を覺える程の人は必ず彼の作に接しなかつた人はまれであらう。明治の文壇で彼はたしかに漱石と共に、最もポピュラリティーを有する人であつた。當時の若い私の心を最も動かしたものは、その文章美しきが故ではなかつた。失戀の涙にくれる感傷兒としてでもなかつた。最も熱烈なる人生の探求者の一人としてであつた。所謂哲人的精神を彼に見出したからであつた。併し思ふに彼は學者ではなかつた。兎も角も學位は得た。だけれども、學者として深く尊敬する程の業績は、必ずしも残して居ない。彼の學的方面の論叢としては、美學及び美術史の研究であらう。が、今日ではもはや何もやかましく云ふ程のものでない。中學か高等學校の教科書程度のものである。彼の逝いた時、大町桂月が彼を評して「彼和漢洋の語に通じ、學東西に亘り、識古今に及ぶ」とか云ふ言葉を用ひたものである。して見れば、日本の文化もさすがに、進歩の跡歴然たるものがあると言はねばならぬ。

否學者と云はんより、寧ろ詩人であつた。死んだら山紫水明の地に骨を埋めんとするローマ

ンチストであつた。「われ死なば、ならびの岡の花の下」と云つた詩人と、なんとよく似て居るではないか。月明のタハクネを抱きて泣く詩人であつた。「萬山木黄ばみ落つる」を見ては胸を傷める彼であつた。落陽の沈づむを見ては「いかに美しく空に輝けばとて、終りには地に沈む陽ぞ、青春人にして幾許ぞ、思へば惜しき過去となりき」と叫ぶ感傷詩人であつた。さても多感多恨の人ではなかつたか。

かゝる多感の彼であつたればこそ、ニイチエの美的生活に心酔ひ、直ちに日本主義者となり、國家主義者となり、果ては又煩悶懊惱の極、日蓮主義に最後の安住地を求めたのであつた。ひやう、變常ならずと云へば、それ迄であるが、そはやがて彼の多感の性を示さずして何であらう。併し絶えずあえぎ求むる激潮たるその精神生活に、私達はむしろ多大の同感を覺えないでは居られない。

今私は彼の思想の變遷をば一々跡附ける暇もないし、又その必要もないが、かゝる思想變化はたゞ彼の精神生活にとつては、必然の歸結であつた。所謂迎合でもなければ、態とらしい新しがりでもなかつた。凡てはその「內的必然的發展」であつた。彼が思想家として華々しい生活

を造り得たのは、實に之あるが爲めではなかつたらうか。その文章絢爛にして、詞藻豊かであつたのも、無論大なる力であつた。その多感の情熱をもてるセンチメンタリズムにも依つて居た。更に私はその純眞な態度、眞摯な氣持からであると思ふ。その晩年に至るまで、純眞な青年の氣持を失はなかつたからではあるまいか。

彼の性格に於けるかやうな諸要素を考へて見ると、彼こそは所謂文明批評家として、最も格好な資格をもつた人であらうと思ふ。由來文明批評家と云へば、學者ともなれず、劇作家ともなれず、「帶に短したすきに長し」といつた手合がなす仕事のやうに考へられて居る。だが之は甚しい謬見である。思ふにこの業たる最大の難事業であらう。何故と云つて、文明批評家は學者たり、又同時に作家たり得る程のもでなければならぬ。學的組織的の思索に堪へ、兼ねて藝術的天分に恵まれて居らねばならぬ。そして彼は文明文化の諸現象に對し、深き同情と理解とを有するものでなければならぬ。更に情熱と氣魄とが十分に、その背後に用意されて居るべきである。其他數へれば様々あるであらうが、これは文明批評家たる資格の三大要素であらうと思ふ。

かゝる意味で私は之をわが過去の文學史に於ては、兼好法師に見出す。

歐米の思想界で尋ねたら、先づニイチエやトーマス・カーライルに指を屈しやう。若し夫れ明治の思想界に之を求めらば、樗牛こそは其の第一人者に居るべき人であらう。

明治大正を通じて、わが思想界には立派な批評家を有たなかつた。これわが文化のため最大の悲しみである。哲人支配者たれとプラトンが云つたやうな意味で、文明批評家は文化の指導原理を具體的に示す先驅者でなければならぬ。そは只氣魄ある哲人のみ、能くなし得る處であらう。にも拘らず、わが思想界は中澤臨川のやうな、翻譯業者を以て一大批評家となして居ねばならなかつた。厨川白村の如きジャーナリストを大評論家と仰がねばならなかつた。かゝる思想界に何の良き文化生れんやである。文化の當さに興らんとして興らなかつた理由は、決して他にない、と私は信ずるものである。

併し之等の詳細に亘つては他の機會をまつとしやう。「わが文明の評壇の回顧」と云つた事に就いて、いつか私見を述べて見度と思ふ。

併し楊牛がかやうな意味に於て、よく文明批評家として職責を果し得たと云ふ譯ぢやない。只最もよき條件を具備した人ではなかつたか、と云ふのみである。未だかすに年を以てせねばならなかつたとは云へ、今少しの學的組織が欲しかつた。思想的體系としては、未だ勿論十分なものではなかつた。のみならず、彼の精神生活に於ては、其の思索的態度が徹底を缺くの憾みがありはしなかつたか。彼には鋭き直觀の働きが優れて惠まれて居た。確かに彼に於て卓拔なものがあつた。けれど思索の洗練未だ及ばざるものがある。彼の思想の變遷を以て、內的必然とは云つたものの、それは深き思索の跡と云ふよりも、むしろその直觀の示す方向に従つて動いたと云はれないだらうか。

例へば彼の有名の言葉として「吾人は現代を超越せざるべからず」と云ふ語がある。超越との語は、彼のこの句によつて、寧ろ世に喧傳されたのであらう。元來超越などの言葉には、餘程深い思索がなくてはならない。其の後世の多くが解する處に依れば、超越は離脱などと考へられて居る。伯夷叔済が周の粟を飯まずと云つて、首陽山にかくれたやうな態度が「現代を超越する」と云ふやうに考へられて居る。之では超越とは殆ど、眞義に徹したものと云はれな

い。かゝる世間の解釋が、即ち彼の見解であつたと、速断するものではないが、思索の精緻徹底には甚だ遺憾の點があつたと思ふ。所詮彼は明治三十年代の文明批評家ではあつたらう。併し、將來私達の求むるそれではなかつた。只その情熱、その氣魄、その眞摯は以て範とするに足る人であつた。

かく考へ來つて疲れし筆をおけば、夜すでに更けて、濱邊の松に夜平の嵐が騒しい。いざ旅寢の枕に今宵も夢を結ばんかな。

### 三保の明け暮れ

學生の頃から通算すれば、私の東都生活はもう幾年かになる。その間只の一度も、正月を都で迎へた事がない。暮れの二十九日と云ふに松澤の家を出て、駿河灣なる三保の松原に志した。出来る丈都にそむいて、孤獨の閑靜を味ははうと云ふ考へである。

宿の離れにあけくれを送つて居る。椽側には數歩を出でずして清見潟の波が、岸を洗つて居る。夜のしじまには、まるで佳人の衣ずれのやうな音を立てる。清水港から三保の燈臺に通ふ發動機が、時にかた、ことと云ふ。齋人が琴を弾ぜんとする用意かとも想像される。室の正面は興津に相對して居る。夜には燈が漁火の様に散點する。耳を澄ませばあの清見寺の鐘がきこえさう。興津の地一帯を抱く群山連峰の後には、富士が天女の様な氣高い姿を見せる。朝起ると、先づこの清姿を見ながら、ウエストミンスター一本を悠々くゆらすのである。ホーソン

○ Twice Told Tales のなかにある、グレートストーン・フェースを想ひ出したりする。

願れば、この地とはかなり昔なじみの譯なのだが、だと云つてこの宿へは學生の頃一度泊つたきりだつた。ところがこゝに一人の少年が居る。今年三月小學を出で、中學に入らうと云ふのである。目下入學試験の準備中と云ふ譯で、私の着いた翌晩から、いきなり少し準備に手傳つてくれとの話。まことに氣の良い事おびたしい。宅に居ては學生の訪問が煩さいからと思つて、謂はゞ逃げて來た私である。少しは世の繁累を離れて、讀んだり書いたりし度いと思つて來た私である。試験準備の面倒を見よとは恐縮の外ない。少年もさるもので、家庭教師でも來たのかと云ふ顔で、堂々とやつて來る。人の氣も知らないでと云へば、それまでだが、つく／＼閑地の氣樂さを思ふ。尾を振つてなついて來れば、猫や犬だつて追ひやられない。私は惟々として、流水算だの分數の加減乗除をやつたものである。うちではやかましいおやちとして親類の子供達も近寄らうとしないが、旅なれば、そのむづかしさもなくなつて居るのだらう。

いつか讀まうとして機會がなかつたジラーの「哲學的論策」と、デルタイの「詩と體驗」とを讀み度いと携へて來た。シーラーがゲーテと並んで、獨逸文壇の巨匠と云ふ事は誰でもよ



く知つて居るが、その哲學的思索は割合に知られて居ない。キムネーマン編「哲學的書簡」はそのため恰好なものである。シーラーの有名な「美的教育論」はこの中に收められてある。日本文壇の月評式評論とちがつて、なか／＼しつかりしたものである。殊に詞藻豊富で含蓄のある表現、さすがは詩人の作である。

デイルタイの「詩と體驗」はレッシングや、ゲーテやノヴリースなどの評傳及び批評である。これは大學で講義したものを集めたもので一九一四年初版が出た。文學の考察に一の風を起したと云ふ因縁附である。作者の心理的必然を辿つて書いた文藝評論で、なか／＼面白い。

上智大學に居られるキューエンベルク博士から、クリスマスの日に一冊の著述を贈られた。博士專攻の「カント道德哲學」に關する論作である。少し感想を書かしてもらはうと思ふのだが、家において來た。さう云へば榎山半三郎氏の「佛敎讀本」に就いても、是非書き度いが、之又今手許にない。何時かの機會に一緒に書かう。

## 房州の旅

學校の講義を終えたのが二月の終りであつた。世から離れて學究の他、仕事のない私ではあるが、様々の雜務に追はれて一週の日はまたたく間に過ぎた。やつと之等の事を片づけて遁がれるやうにして都を出たのは去る水曜日だつた。それは篠つくやうな雨の日だつた。でも家に落付く氣もしないので急ぎ房州の旅にと志したのである。兩國から汽車にのるのだが、餘りの雨なので荷物を新宿驛に預けたり、旅の用意に萬年筆などを丸善で買整へるやら、大儀のやうに思はれた。

途中千葉に降りて石丸兄を訪ねた。そしてこゝで泊めてもらつて、又一夜を語りあかした。先輩や同人達が豫ねて大變氣にして居た兄の健康も、近頃頗みに恢復したやうである。そして大いに筆に油が乗つて來た。喜ぶもの獨り我等友人許りではない。

あくれば天気全く快晴獨り漂然と本千葉驛から、房州鴨川に向ふ。旅と云へば氣の合ふ友と打語らひながら、旅するの興多い事だが、私は一人の旅をこよなくも喜ぶものである。「片雲の心に誘はれて漂泊の思ひやまず」と云つて、旅から旅を歩いた芭蕉の心がいつも慰ばれてならぬ。何處に行つても、魂の憩ひ家を未だに見出し得ないからこそ、私も旅して歩くのだ。生涯恐らく同じやうな氣持が続くであらう。思へば淋しい事ではある。かゝる旅に常に私の伴侶となるは、只一卷の書である。只一管の筆である。

鴨川から更に自動車をかつて天津に行つた。友が天津に然るべき家を見つけたと云つたからであつた。先づ宿について一夜波の音をきいた。翌る日をまつて定められた寺の室をのぞいて見ると、感じの悪い事一通りでない。官能派の要素を多分にもつ私にはとても堪えられない。それで宿なる蓬萊屋に落付かうと主人に交渉して見ると、このおやちが感じの悪いこと一通りでない。どうしやうかと思案して居るとここに一通の電報を手にした。

見れば學校からである。至急用あり歸れとの事である。人の心も知らないでと、しやくにもさはらぬではなかつた。併し宮仕への身とて、だし難くあたふたと歸京の汽車に投じた。歸るや

早瀬文學部長から「學年末の忙しいのに悠々旅に靜養とは何事ぞ」と、ゑらい權幕でしかられたものである。こんな場合に彼此申譯を云つても仕方がない。黙々として當面の事を始末するより他はない。

今日は朝から都には珍しい大雪である。風さへ強く吹いて、北國を思はせるやうな大吹雪だ。北の國に忘じ難き私の思ひ出がある。かゝる日に一しほ感傷の心を喚るのである。それは兎もあれ、雪のためか電燈は消えて僅かに一本の臘燭を頼りに筆を走らした。不便は不便だし、暗いには暗いが詩情豊かなものがある。頭もさへて來るやうだ。

## 新潟行 き

五月廿四日の夜である。九時半發の磐越線の汽車に投ずるために私は上野に急いだ。見送つてくれた若い人達に別れてから、食堂列車に入るべく同行の數氏を語らつた。まだ晚めしも濟んで居ないしとても空腹なのである。ところが食堂列車がない。いま／＼しくて仕方がない。同行の諸氏は晚餐どころか、どうやら麥酒の泡もまだ残つて居るらしい。愈々氣持ちがヒステリックになつて来る。で、幹事をかき口説いた。その效あつて大宮からビールと正宗とが惠まされた。どうやら之で溜飲が下がつたのみならず、今度はメートルが盛んに上がつて來た。十四日の月は中天にかゝり、汽車は走る。そして杯をかたむくるのである。全く天下の雄たるの思ひである。知らない間に夜半もすぎた。すつかり疲れきつて、思ひ／＼に眠りについたので一時も近かつたらう。忘れて居たが、我々一行は、新潟に向かつて居るのだつた。つまり山岡博

士に隨行する我等四人である。即ち代議士箸本太吉君、鐵道院の野村雪堂君、それに學校の學友課長世耕弘一君などである。新潟で、廿五日校友大會があると云ふので、招きに應じたのだ。

夜もあけて汽車が長岡あたりにさしかゝると、そろ／＼新潟支部長今成氏を始め、瀧澤時事社員など迎ひの人達が車に乗られる。頂きにまだ消えやらぬ山の雪をながめながら、彼の地の近況を承つた。愈々驛に着けば素晴らしい迎ひの人達である。この人達にかこまれながら小甚旅館に着く。午後一時から赤十字支部樓上で講演會が開かれた。世耕君は經濟の方面から語り箸本君は政治を論じた。私は勿論宗教に就いて説くのだつた。最後に山岡博士は「現代日本民族の使命」と云ふので、全體を總括していと深切に説かれた。講演が濟んでから、種々な人が講師控室に見えた。その折或人が「日頃閣下は秋霜烈日のやうな方だと思つて居だが、お話を承つて溫和な事玉の様なお人柄なのを知つて、嬉しかった」と云つたのは、新潟刑務所長の飯島氏であつた。これは實際偽りない處であらう。それから引續いて今成氏其他のきも入りで、官民合同の歡迎會が開かれた、場所は庭のながめの良い行形亭であつた。尾崎判事、堀田裁判

係長、猪俣検事正、中村警察部長などを始めとして、大變な宴會であつた。何しろ大したものである。親の光り七光りで、私なんか大いに厚遇を辱なうした次第である。

あくれば、廿六日、天氣快晴。「折角の序だから、只一またぎの佐渡まで渡らうではないか」と云ふ事になつた。博士も我等陣笠どもの獻策を大きく肯かれた。と云つてゐる處に、今成支部長君や岡崎教諭や富岡社會主筆が來つて、彌彦神社訪問を慫慂されるのである。抑々彌彦神社は官幣中社であつて、その周りには巨費を投じてこさへ上げたすばらしい公園もある。土産に見て行つてくれとの事。十時に宿を出る。往復二十里を自動車でドライブしやうと云ふのだが、何しろ迂餘曲折、高低參差の舊街道で動搖はかなり激しい。まことに坐ながらにして良い運動である。二時には新潟の港をば佐渡に向けて立たねばならぬ。神社に着いて參拜するが早いか、又車上の人となるのだつた。羊かんや、林檎や、バナナを車上でかじつてゐるをしのいだのも旅の情趣である。

佐渡の金山のある相川の町についた頃には、陽もとつぶり暮れて居た。夜はこゝの後藤署長の案内で音に聞くお袈裟踊を見せてもらふ。

來よとて行かれうか佐渡へよ

佐渡は四十九里波の上……

歌詞も優しい哀愁の感じを傳へる、が節もよい。よく磨かれてゐるのは、出雲節などの比ではない。殊にあみ笠かぶつて、紋附きのもよぎの着物に角帯の着附での踊りは、邊すらの郷土藝術とは思はれない、みやびさを持つて居る。かうした藝術に地方色を出してゐるのは、誠に嬉しい事である。いか許り彼等の誇りである事か。又いか許り旅人の心を慰める事か。

翌廿七日は早朝から起き出でて金山の見物である。暗い々々鑛山の穴にカンテラを付けて歩いた情景は、とても忘れ難いものである。炭坑の生活だ、銅山の生活だと云つて、我等とはまるで世界が違つて居るやうに考へて居るのだが、寧んぞ知らん。我等の日常も、また暗い人生の穴をかすかなカンテラをともして歩いて居るのではないか。どうして之が人ごとであらう。やが

て私達の生活ではないか、と思つたりして興は多かつた。それから順徳帝の御陵だ、日蓮の遺跡塚原三昧堂だと云つた鹽梅に、忙しく歩きまはつた。なか／＼に訪ねあるくのが忙しかつた。御陵を詣でた折に、箸本君が「逝く春やみ跡したひて五百年」と、墨痕鮮かに句を書いてのけたものである。綿入にしては、少し、あかが抜けすぎてゐる。どこぞから失敬したのでないかと、物議をかました。政府委員の様な格好で大いに彼辯解に務めて居た。彼にもまだ可愛いくところがある。その夜八時半には、早くも新潟發の列車の人となつて居た。寢臺のなかで大いに宗教論に花を咲かした。かう話がつて來ると、私が政府委員になつて山岡博士が助け舟と出て來る幕となる。兎まれ新潟行は、忙しくも面白い旅ではあつた。

## 東 北 の 旅

「奥の細道」の跡をついて歩き度いとは先達て來の願ひであつた。その念願が叶ふ譯か、八月二日の未明、上野驛から汽車に乗つて東北の旅につく事となつた。旅の衣はすゝかけのと云つた「勸進帳」もどきに、一蓑一笠の旅装ならば良いのだが、トランクにかん／＼の麥わら帽子、それにステッキと來ては、一寸詩情が浮びさうにもない。こんな旅姿では、未來派か表現派のならばいざ知らず、どうしても詩は生れない。殊にその日の四時半に仙臺について、七時からラヂオの放送と云ふ役目があつて見れば、愈々詩はぶつこわしである。鹽釜を訪ふいとまもなければ、松島探勝のゆとりもない。又越へて八月四日の夜は、北海道札幌で放送せねばならぬので、あたふたと仙臺の夜汽車にのるのであつた。

かうして現代の「奥の細道」は詩もなく歌もなく、全く事務となつて了つた。

陰鬱な天気はなか／＼に晴れない。上野を出て間もなく降り出した雨は、益々降り切つて来る。草履ばきでか／＼の用意はなくとも、まさかとなれば車でも奮發するから良いとしてもこの寒さは一體どうした事だらう。トランクがあるにはあるが、大抵、洋書許りである。セルダの冬シャツなどの用意があらう筈はない。夏の薄シャツを重ねて着ても、所詮暖を増すべくもない。衣食足つて禮節を知る譯で、かう寒くては愈々詩のうもひつそくする外はない。かくて青森から札幌につくまでがた／＼ふるへ通してあつた。雄大なる北國の景も、千古斧を入れないやうな處女林の姿も、之では仕方がない。感激はこゝえて了つて居る。

仙臺では「藝術より宗教へ」と題し、札幌では「藝術漫談」と云つたやうな事で話した。昨年の春だつたか、東京放送局で放送した時は、とても變であつたが、今度は餘程なれたやうである。聴衆を幻の如く思ひ浮べるだけの心の餘裕が出来て来た。それにこの前には原稿を一言一句間違はないやうにしたものであるが、こんどは、そんな事はしなかつた。他の人はどうだか知らぬが、私の講演はどうも原稿通りにやるやうでは失敗である。一番良いのは原稿のない方が良い。原稿に促はれると、気分は出ないし熱はあがらない。従つて生命の躍動がない。

仕事は兎に角終つた。之から愈々閑を得て思ひに耽らうと思ふのである。もう全く俗務を忘れやう。いや忘れさして貰はう。幸ひ札幌の北西岩藻温泉なるものを發見した。小高い陵丘であり、山の中腹になつて一大原野を隔て、はるか彼方に札幌市街を展望する事が出来る。ポブラがすんなりとした姿をして散在するのは、楚々たる佳人のたゞすまいと云つた風情である。温泉と云へば大變ブルジョアらしいが、餘り名を知られて居ないかして、殆んど杖をひく客もない。旅舎と來たら、とても原始的な素朴なものである。室も自分で掃除せねばならず、食事の献立も自分で考へねばならぬ、と云つた風である。それだけに氣は置けないし、田舎のおばさんの家にも行つたやうな氣持がする。都に何が起らうと、月の終り位までは、浮き世離れた氣持を、しんみり味はしてもらひたいものである。

## 伊太利會遊を憶ふ

私の伊太利への旅は、もう幾年か前の春の休みに企てられたのだつた。旅の連れとしては、岩崎、大江の兩君があつた。ミラノ、ゼノア、ローマなどの古い都々を経て、ナポリに入つた。こゝの美術館には彫刻作品の素晴らしいものがあつた。でももつと私を喜ばしたものがあつた。それは他でもない。クローチエ博士への訪問であつた。博士がこゝに在ると聞いて、この邦に對する私の憧憬はどんなに強かつたか分らない。

私達の汽車がこの町に着いたのは夕暗こめた七時頃だつた。宿につくなり晚餐をとつて、早速博士に電話をかけた。東洋から來た無名の學徒で、紹介状ももつて居ないが、訪問出來まいかと問ふた。すぐにも待つて居るからとの事で、あたふたと馬車に乗つた。ツリニタ・マヂヨーンのその邸宅の門を叩いたのは、彼此十時も廻つて居る頃だつた。それでも博士は快く迎

へ入れて呉れた。剩へ家族一同で私を歓迎してくれるのだつた。博士の家には夫人との間に一男四女があつた。夫人がまだ若いためか、お子さん達は皆小さかつた。一番頭は長女のエレナ嬢で十二と云ふ愛くるしい盛りだつた。嬢はその兄弟姉妹の寫眞を私に贈つてくれた。

博士と私の會話は多く獨逸語であつた。夫人やエレナ嬢との話には、博士自らの通譯を煩はさねばならなかつた。こゝに滞在したのは僅か三日にすぎなかつたが、私は後二度許り博士を訪ふのだつた。私がのち獨逸に在る間、博士やエレナ嬢は幾度となく手紙をくれた。故國に歸つて後も未だに音信を絶たれない。博士が時々贈られる著述のなかにはいつも可憐なエレナ嬢の文字がなやかに書かれてある。今度もらつた短信にも、嬢はその言葉を添ふる事を忘れなかつた。不自由にして、而も只束の間の交りであつたのに、どうしてかほどまでに印象を残したものであらう。人の交り程世にも不思議なものはない。思ひはかくて伊太利會遊の日に歸る。

## 十和田湖と大湯温泉

十和田湖と云へば、あそこを訪ふたのは、ちやうど大正十二年の夏だった。その年八月には東北地方への講演の旅に出かけたものである。秋田縣は平鹿郡を振出しに、あのあたりを講演行脚のため廻り歩いた。旅のつれとして妻があつた。下旬にそれ等の約束を果したので、靜養のため温泉めぐりを試みるのだつた。序に杖をひいたのが例の十和田湖である。こゝに来るには青森縣の方から入る道もあると聞くが、私達は汽車を大館にすてた。そこから乗合に投ぜねばならぬ。何うしたのか、都合よくそれを拾ふ事が出来ないで困うじ果てゝ居ると、旅は道連れとよく云つたもので、旨い工合に救ひの神が現れた。縣の大官が視察のため、十和田まで行かれるのに打つかつた。お困りならばと云ふので、二人同乗を許されるのだつた。全く地獄に佛である。

大館から十和田まで何里あるか知らないが、自動車で二時間近くかゝつたやうに覺えてゐる。湖一帯は和井内氏の領するところと聞いて居る。何しろ縣廳からの巡視と聞いて大騒ぎの歡待のやうだつた。私達はそれにもあやかる始末であつた。湖の見物も濟んだので、歸路には程遠くもない大湯温泉につかる事とした。又自動車でこゝまで送り届けてもらうのだつた。何處何處まで行届いた親切振りである。知らぬ旅の空で脚をものがれ、杖をとられた様子の折からだつたので、その親切さは今以つて忘れ難いものがあるし、さすがに厚顔ましい私も、痛み入る事一通りではなかつた。

この親切なお役人は誰あらう、當時の縣警察部長村地信夫氏だつた。その後絶えて相會ふの日はないが、氏はだん／＼偉い人となつて、今では時めく警視廳官房主事である。一度訪ねて當年のお禮を申述べやうとは思ふのだが、それも面はゆい氣がして、未だに以て出かけないでゐる。恐らく氏はもう忘れて居られる事だらうが、かうなると恩は受けた方が、むしろ感銘の深いものゝやうだ。

この大湯温泉と云ふのが素敵である。こゝらあたりで、温泉と云つたら、箱根、熱海、伊香



保、など、定つて居て、一向に面白くない。もちろん温泉には違ひないが、餘りに都會化してゐるのが淋しいのだ。交通にしたつて僅に二時間位いのもので、ランデブーなんかには一寸便利で有難いだらうが、味の深さがないやうだ。

ところが大湯温泉はすつかりそれ等と違ふのだ。第一宿屋が一軒か二軒きりしかない。元より内風呂である。都會人の影も見えず、荒された跡の毫末もないのが良い。田園の情趣あふるものがある。大袈裟に云へば太古の姿である。武陵桃源とか云ふ言葉を聞くが、こんな處かと思はれる。湯に浸りながら、夢心地に鶏犬の鳴くのを聞くのが堪らなく嬉しいのだ。

### 温泉 さ ま ざ ま

何う云ふものか、私は入浴が好きである。それで温泉は相當歩いたやうだ。北は北海道から南は九州のはて迄、到らぬ隅もないと云へば少々肩つばだが、かなり歩き廻つた。總じて人の口の端に上るところは、大衆性があり過ぎて良くない。と云ふ意味は貴族趣味を求めるのではない。こゝで大衆性とは都會性を云ふのだ。近頃の熱海なんかを見るが良い。まるで銀座か新宿の延長みたいだ。あゝ云つた姿も時代の要求として生れたもので、あれを楽しみに行く人もあらう。だがあんなものを求めるのに何も態々出張る事もないだらう。私達が温泉に求むるところのものは温き自然の懐である。原始素朴の純情さである。ところが今では大方それがなくなつて了つた。たゞの遊蕩場になり果てた。さう云ふ意味で九州の人吉温泉なんかは一寸良い。殊にあの球磨川に臨んだ風致は素敵だが、やはり柄にもない都會臭がある。和歌山縣は新宮の

奥に湯之峰なる温泉がある。いかにも深山の奥と云つた感じだし、昔の湯場の気分が湧いて居た。が、純朴の氣は失はれて居たやうだ。

今度は北に轉じて北海道の藻岩になると、斷然田舎くさい温泉である。設備も至つて振はない。そこに情緒がある。札幌から二里足らずのところだがよくもあんな處が残されて居るものだと思ふ。殊に石狩の大平原を一時のうちにおさめるのである。こんな雄大な姿は一寸内地では見られない。私は一夏を論文制作のためこゝにすごした。朝の日の出や沈む夕陽の大きな美しさと云つたらないんだ。印度洋や地中海などで見たやうな落日の偉大さを思はせる。何と云つても日本は、火山國だけあつて湯の國である。到るところ美しい温泉に恵まれて居る。温泉廻りだけで一生はすごせるだらう。所謂温泉情緒を味ふには日本に限る。だいいち、この閑雅な気分なんかは外國人などには分りつこない。

### 江の島よりカプリを憶ふ

鶴沼に居る一友、今日は日曜と云ふのでやつて來た。つい話はあるあたりをさ迷ひ、江の島に及ぶのであつた。江の島と云へば、もう幾年の前だらうか。死んだ妻がまだ家に在る頃、家を鎌倉に求めて探し歩いた。すっかり疲れて今夜は江の島に一夜を過さうではないか、と云ふ事になつて谷本樓に投じた。くたびれ果て、床に就いて眠に入らうとする頃、いつにない激しい頭痛を覚えるのだつた。何でも東京驛の精養軒で飲んだビールがいけなかつたらしい。そんな譯で這々の體で逃げ歸つたことを思ひ出す。

江の島から聯想されるのは伊太利のカプリである。滞歐の頃の日記を引出して見ると、大正十四年の三月三十日に伊太利ナポリに着いたとなつて居る。カプリ島はナポリ港外の島である。森鷗外譯するところの「即興詩人」の最後に極めて鮮かに記されて居る。ナポリの町を朝船に

乗つて行くと、悠々見物して夕方には歸られるやうな處に在る。私の日記には美術館行脚の段になると、克明に書いてあるが、肝心の島の風景になると、もう眠いからよすと云つた風に、一向觸れて居ない。元來私はずっと都會育ちの所爲か知らんが、兎角自然描寫に至つては殊更に拙いのである。今記憶に残つて居るのは、江の島の洞窟見たいな大きなほら穴である。だがそのスケールに至つては江の島と違つて大きいには大きい、又奥行もなかく、五丁や六丁もあらうかと思はれた。十人あまりも乗れる端艇でずん／＼奥へ入つて行けるのだ。端艇が五六隻は優に出入り出来やうか。記すべきはその紺碧の水である。否青緑の色である。緑もぞ濃きと云ふのは、こんなのを指すかと思はれるやうな、滴るが如き深みどりのだ。而も飽迄も透明である。千尋の深さを湛えて居る。餘りの透明さにはす慄然として、總身には立つ思ひである。遂には凝視に堪へずして面をそ向ける。沈む夕陽の光に映えて、益々悽い様な美しさを増して見えるのだ。

底深き透明さには、一種名狀し難い凄愴の感がある。いつか十和田湖に遊んだが、こんな思ひをしたものだ。近江は琵琶湖の竹生島のほとりも、かなりの深さのやうだが、十和田湖のそ

れには及ぶまい。どこ／＼までも、牙へ牙へと透き徹つて、畏怖の念すら湧く。神韻の氣さへたゞよひ、果ては息づまる程になるのである。これこそ神秘境であらうか。

## ダンスと旅心

關西に旅すると、若い氣分の人達に接する關係からか、よくダンスホールに誘はれる。誘はれたとなると、いつでも良しで出掛けるのである。と云つて自分で踊らうとするのではない。行くには行つても只あの雰圍氣に浸るのみである。どうしても一緒に皆と踊る勇氣が出ない。第一、羽織袴の私のダンス姿なんか、考へて見たとけでも自分ながらぞつとする。それに生來無器用な私である許りでなく、運動神經も相當に鈍いので見られた格好ではあるまい。何もグロテスクの標本にならなくても良いと考へるのである。

皆んなが楽しさうに打興する様を靜かに眺めて居れば澤山なのだ。總じて日本のホールは何處でも喧騒の感が深い。よしんばジャズが入つて居るにせよ、歐羅巴のそれは、こんな様ではなかつたがと思つたりする。だいいち少しもリズムカルでないのである。バンドも無暗に先きを

急がうとする。その焦燥の氣持つたらないんだ。チケットの数がたゞもう多きを願つて居るやうに思はれて仕方がない。私のいやしい根性から出たひびが目だらうか。いらだゝしいのは、併し獨りホールのバンドに限るまい。當今の世相なのであるそれが非常時風景とでも云ふのだらう。好んで私が出かけやうとするのも、都のかゝる焦燥から逃れ度いからなのだ。夜さへおち／＼眠れない程、種々な仕事に追ひまくられる。仕事とあらば、大小となく辭せまい。積極的にさがし求めやうとも思はないが、おし掛つて来るものから逃避はすまいなんか思つて居るから、斯うなのであらう。昂奮して眠れない夜もよくあるが、性の惱みなど云ふやうな、しやれたものでない。積る仕事を、次から次に考へたりするからである。

人生は闘争なんだ。戦つたら勝てと云ふのが私の標語であるとは云ふものゝ、強ちに勝負をその場その場でつけよと云ふのではない。スピノーザの言ふやうに「永恒の相」の下での勝たれば良からう。斯んな次第で不斷の緊張がなければならぬ。かゝる張りつめた氣持から、旅は解放して呉れるのである。それが有難いのだ。それに汽車にのつて、移り行く自然の風光を、無心に眺めて居ると、いろんな發想が浮かぶ。又それが良い。

汽車だと用人が訪ねて来る事もないし、面會を強要される思ひもないし、お世辭や挨拶の心遣ひも要らぬ。しみりした氣持になつて「我」に歸ることが出来る。多勢の人のなかに居たんでは、氣兼氣苦勞のために、どんなに我を没却するか分からない。自分獨りとなつて、始めて本然の自分を見出すのである。

とは云へ人を厭ひ、世を嫌らひ得る私ではない。それどころか、絶えず人を求め世間に對する執着は人一倍強い。強ければこそ、世から脱れ人から暫くでも離れんとするのである。「旅する心」はつまりその動きではないのか。西行や芭蕉が、好んで旅しやうとしたのも、所詮その現はれではなかつたのか。三原山上、果敢なくも逝つた人達の氣持も、やはりかうした心の延長ではなかつたのだらうか。

それだから自殺者の心理は生命の否定ではなく、むしろ永遠の生命をあこかれる心だ、と、私は近著で云つたのは、必ずしも私の獨斷ではないだらう。否定は否定でない、肯定なんだ。眞理の懷疑論者は眞理への求道者である。虚無論者は却つて、大きな存在論者であつた。これは詭辯ではない。辯證法の論理である。

筆が理に落ちた。又ダンスホールにもどらう。聞けば大阪や京都ではホールは許可されないことや。だから京阪の人達は、大津や阪神國道の抗瀬とか云ふところ迄、遠征しなくてはならぬ。何故當局は許さないんだ。無理解も甚しい。と怒鳴るも良いが、ホールを目當て、國道を圓タクでドライブするも一興である。

虫の音や河内通ひの小提灯

の句を思ひ出す。

## 旅に病む

都を立つたのは前月の二十日の夜だつた。西へ／＼へと足を向けて、北九州から郷里長崎地方を歩いたものだ。今歸東の途すがらにある。旅の杖を暫く奈良や丹波市あたりに留めて居るところなのだ。こゝへ歸つてもう三日になる。大方は旅のつとめを果し、同行の者達も東京へ返したので、全く身軽になつた。で、初めて心に懸る原稿の筆でも走らさうとはするのだが、思ふやうにベンが動かない。二週に近い旅だつたので、印象に残つたものも尠くない。それも想が纏らない。

それにどうしたと云ふのだらう。こゝに歸つた日の深夜から激しい腹痛である。もと／＼瘦軀にして蒲柳のたちとも見えるのだが、身體に故障のあるなどの事は至つて珍しい。先づ絶無と云つて良い。風を引いて發熱しても、食あたりで失敗つても、大抵一晩もぐつすり寝たら、

けろりと元の身體になるのである。今度のは少ししつこいやうだ。その夜の數回の下痢は良いとして、翌日になるも否三日目の今日までも、週期的にちくりと痛みが襲つて来る。勿論寢込む程の大きやうなものではない。が、所謂神の御意見でもあらうか。

痛みは痛みとして意識する時に苦痛となる。痛いと思つた時には、ともすれば忘れ勝ちとなる神の恩寵を思ひ出でよとの神の呼び聲と見たならば、苦惱はむしろ感謝でなければならぬ。私などのやうな傲岸不遜の人間には、斯うした鞭でも與へられなければ、敬虔の心の懐くやうになる事は覺えないであらう。

それで居て昨夜などは斯うである。晩の御飯が済んで詰所の前で椅子を出して涼を入れて居た。するとM氏が少し散歩しやうかとの聲懸りだ。早速O・Kと自動車を呼んでもらつた。ならばA氏もと思つて探したが見當らない。ではと云ふので二人で車を北へ／＼と走らす。ものゝ三分もすると猿澤池畔へ出た。こゝで車をすてた。と云ふのは、あの邊りが馬鹿に色彩豊かな騒がしきだ。奈良は元檢の美妓オン・パレードでサーピスしやうと云ふ納涼ビヤホールが今日開かれたのださうな。興福寺の塔のあたりから、畔池にかけて幔幕打めぐらしたる涼みの趣向であ

る。

それに美人の踊りも見られると云ふ景物付き。これでは腹痛も打忘れて御意はよしと云ふのか、では麥酒一杯戴かうと幕をくぐつて中に入る。こんなさんざめきに酔つて、詰所に歸つたのは、餘程夜も更けて居た。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻り

ならば、さすが俳聖らしいが、旅に病んでかうして泳ぎ廻るんだから、遂に救はるべくもない譯ではある。

芝居と音楽

## 文五郎のお園

大阪に居た頃私は、殆んど毎月かかさないうで、御靈前の文樂に、出かけたものである。東京に移り住んでからはそれが出来なくなつたのが淋しいものに思はれる。獨逸留學の歸途、先づ大阪に下りて文樂にかけ着けた。さすがに忘れ兼ねたからである。態々そのため東京から大阪へ、一晩泊りで行かうと思ふのだが、それもいざとなると、思ふやうにならぬ。七月の明治座は久しぶりに私のこの思ひを満して呉れた。

私の見たのは一の替りの二日目だつた。辨慶上使で殊に目についたのは、紋十郎の上達であつた。彼は女房おわさを遣つた。この芝居が全くおわさの出し物である事を完全に示したと云つて良い。その活躍の姿は心憎くさへ思はれた。かと言つて、紋十郎君よ思ひあがつては良い。文五郎の老練なる至藝と較ぶれば、なる程、年の磨きは争はれないのだ。



文五郎は三つか四つかの女形を遣つた。千本櫻の靜は、勿論文句がなかつた。榮三郎の忠信と相俟つて良い芝居であつた。語りは南部以下中堅どこ、数名のオール・スター・キャストであつた。頭に残つて居るのは南部の美聲である。將來の約束を思はせるものがある。ところで又文五郎に返つて、彼の技中斷然光つて居たのは、酒屋のお園である。「今頃は半七さん」のさわりからは、見せ場であらうが、何と言ふ巧緻さであらう。あの場などは人間の芝居では、だれて見られたものではないと思はれるが、少しの倦怠どころか、陶醉境に引入ねば己まなかつた。「去年の秋の患ひに」の邊りはどうしてこんなに迄纖細の表現が出来るものか、果して人間わざかと怪しまれる位であつた。半七の遺書をば、半兵衛夫婦と宗岸、お園の四人で互ひに引取りながら讀むところなどは、誠によく人心の機微が把まれて居るのが嬉しかつた。

總じてこの出しものは、太夫と三味線と、人形の息がびつたり合つて居た。三者の息が合つてこそ、綜合藝術の面目が生きて来る。當にこれなどは典型的の綜合藝術だと言つて良い。従つて土佐太夫の語りも光つて居た。一體この人は聲が良い方だ。兎もすれば、それがわざわざ、ひして、藝が軽つぽくなる危険があつた。それで、實言ふと、私は今迄深い敬意を拂ひ得なかつた。

併し今度はまるで見直した。美聲に重厚の味が出て來た。人生を戦ひ通して來たものの澁さである。艶物を只美しいのどて語られては、近頃流行りの蓮葉なエロになつてしまふ。今度の彼に於てこの難は全くなくなつて居る。

津太夫の寺子屋は期待の一つであつた。榮三、文五郎の人形だから、萬事申分ない筈。一體この芝居の見處は松王の首實験以後にある。そこに行く迄が少し間がのびすぎる。それでさへ倦きを覺えさせないで行くのは、さすが紋下津太夫の貫録を十分見せた。が、今度どうも、いつも程、さへなかつたやうに思はれる。文五郎の女房も、お園程動かなかつたのは、どうした事か。先年文樂上京の折、この寺子屋で私は良い印象を得てゐる。やはり津の語りに文五郎の女房だつた。人間の芝居で見られぬ人形特有の味を出すのは、「御臺若君諸共に、しやくり上げたるおん涙」と云ふ邊り以下にある。この前の演出には、あそこで私は恍惚となつて了つた。その姿が今でも私は忘じ難いものになつて居る。でも今度はそれ程ではなかつたやうだ。

併し何にしても、人形は世界に誇るべき大きな藝術である。之を我等が有つて居るだけで自慢しても良いのだ。それがだんく亡びやうとして居る事は國家その者が亡びる位、私には辛

く思はれる。これ程のものが、今の人達には分らないものであらうか。藝術に對する具眼者が次第になくなるのを、私は、たまらなく遺憾に思ふ。

### 松 蔦 の よ さ

松蔦と云へば、今の女形のうちで私の一番好きな優だ。が、適り役を尋ねられても、狂言も人物も名前を忘れて、旅先きではある——困るんだが、漫然好きな氣持ちを辿つて見よう。何でも彼の芝居を始めて見たのは、もう二十年近くにもならうか。まだ學生の頃だつた。其の最初の芝居は『番町皿屋敷』であつたと思ふ。これに無暗に感激したものだつた。其の時は生一本な性格描寫をやつた左團次に心を引かれたやうに覺えてゐる。これが機縁となつて、例の綺堂物を次々とみたものだ。やはり綺堂氏の脚本や左團次の藝の方に興味があつて、松蔦はむしろ二次的のものであつた。

處がどうであらう、十年十五年の間に、精進誠に努めたものとみえて、左團次よりも近頃は彼の女ぶりが、たまらなく私の心を動かす、大向ふからうなり出し度い位なのだ。彼が純情清楚

な乙女の氣持ちを出すのは、他の何人の消從をゆるさぬものがある。この點で水谷八重子の藝風をおもはしめる。八重子の人氣は其の萬年娘なのによらうが、先づ處女らしい高雅な氣品と云ふか、純潔と云はうか、さう云つた點にあるやうだ。松蔦のと、どこかしら共通なものがあるのだが、其の藝術的精練さに至つてはとても同日の談ではない。松蔦に比べると女學校の學藝會ものだと思はれる。松蔦には斷然磨きがかゝつてゐる。

松蔦に一番はまつてゐるのは下町娘といふ處。だから同じ綺堂ものでも「番町皿屋敷」のお菊が最適だ。「室町御所」の多門も良いには良いのだが、姫様の氣品に於て何處か欠けてゐるやうだ。「箕輪心中」に現はれてくる綾衣の純情さはみるに足るべきものがあるが、遊女としての濃艶な色氣や仇つばさで一才喰ひ足りない。そんな味はやはり梅幸か河合に求める外はない。「鳥邊山心中」にはまつてゐるのは、此の祇園の遊女が、まだ出たてといふので町娘の處女らしさが出れば足りるからだ。轉じて歌舞伎劇に彼のはまり役を考へてみる。鎌倉三代記の時姫なども一寸頭に浮ぶのであるが、お姫さまの品格が案じられる。さすれば久松を追ひかけるお染か、乃至は朝顔日記の深雪なんかどうだらう。やつたかも知れないが、まだ見ない。一度見

度いものだ。

もし西洋の近代劇に求めるならば、トーマス・ハーデイの作「ダアパーピルのテス」に於けるテスなんかもつて來いだらう。

## 『宇都宮城史』の大詰

歌舞伎座を先達てのぞいたが、之は芝居その物よりも、見る過程の方が餘程面白かつた。と云ふのは斯うである。去る木曜日の午さがり、D科のS氏が、今日は夕方から少し顔を貸して呉れまいかと云ふのである。七時頃からなら手があくと言へば、四時にして呉れとの言葉なのである。いろんな相談や話があるので、ふだんひる飯は、大抵二人で俱樂部でたべる事にして居るのだから、又何かの急用でもあるのだらうと、譯もきかないで承知した。

四時近くになるとジャン／＼電話で催足である。圓タクでかけ着けて、さて用事はと聞けば、何これから歌舞伎に芝居を観に行くんだ、つき合ひ給へ、と云ふんだ。何んの事だ、芝居かと少々顔まけの體だが、歌舞伎とあらば御意はよしである。欣然として乗込んだ。近頃になく斯うしてこの段は芝居に恵まれる。何しろ有難いことだ。

羽左、幸四郎、梅幸、左團次に、大阪の延若も加はると云ふ大芝居だ。その夜は私の責任の會を控へて居たので、途中一二度出入りしなければならなかつた關係もあらうが、感銘の深いものは割に尠なかつた。最後の「伊勢音頭」は割愛したが、これも大して期待はもてなかつた。中幕の「田舎源氏」も面白い筈だが、肝心の梅幸の東雲が一向に力が入らず、振はなかつた。新作物「博文と李鴻章」は中村吉藏氏の脚本なのだ。軍國主義時代當込みの作だが、更に有難くない。これでは折角の大芝居が臺なしだ。

が、一番目の「宇都宮城史」だけは素敵だつた。それも四幕九場の長篇だが、見どころは大詰の場である。それも最後の五分である。もと／＼この芝居は默阿彌の「宇都宮紅葉釣袞」から來てゐるものらしい。宇都宮城主本田上野は三代目將軍家光をなきものとして、駿河大納言忠長かを擁立しようとするのである。世に名高い釣天井を儲へさせるのは、その初めなのだ。家老河村靱負、普譜奉行藤田誠太郎の如き、主公思ひの忠義者が居るには居るが、元來計劃そのものに無理がある。第一の無理は第二の無理を伴ふと云ふ譯で、この普請に携つた大工は一入残らず惨殺されて了ふ。秘密はこれから漏されてゐる。家光の方からは秘密の裏をかいて、松

平越前守が新建築下檢分の使者に發つ。今はこれ迄なりと本田上野は、單身憤然と城を跡に出  
て行く。越前守は現場を摘發して檢分の使命を果さうとするし、當の責任者藤田は身を以て、  
これを防がうとして、押問答が始まる。そのとき城は火の海と化する。この大詰が馬鹿に氣に  
入つた。

### シユメー女史を聽く

つい先達てのひるだつた。N君が目黒の雅叔園で午餐をとらうと誘つてくれた。あそこは庭  
が馬鹿に良いので、御馳走よりも、その新緑の風情が、私にとつてかなりの誘惑だつた。よし  
と許り出かけて行つた。行つて麥酒の杯を傾けながら、いつの間にか話は音樂論に花が咲いた。  
この頃來朝中のルネ・シユメー女史も話題に上つた。

實は彼女については殆んど私の關心になかつたのだつた。が、先達て一人の若いヴチカリス  
トが來て、女史の偉大なる藝術に關する感激を物語つたものである。それから間もない事、道  
の通りすがりに一二分ばかり女史の放送を耳にした。そして「こいつは素敵だ、いや馬鹿にな  
らぬ」と初めて今までの無關心を私かに恥じたやうな次第。それも無理はない、聽けば女史は  
歐洲女流樂壇の王者だといはれるのださうなもの。その通りにN君に話したら「ちやうど良い

鹽梅た。五月三十一日に日比谷で送別演奏會がありますから」との話。殊に彼の令兄がこれをバツクして居るとかで、如才なく招待券までも呉れた。

かういつた招待券には馴れて居るので、生意氣な話だが、大して感謝をもたないんである。でも女史のと來ては、假令近頃流行の手榴弾を打たれてもといふ譯で、講義を早目に勘辨してもらつて、飛んで行つたのが、昨夜の事だ。會場について見るとちやうど、一部が濟んだところだつた。二部では琴曲の「春の海」とメンデルスゾーンの曲であつた。

成程まのあたり、その技に接して見ると、期待にそむかず素晴らしいものである。繊細微妙の表現は神に入つてゐるといつて良い、殊に特筆して置き度いのは、琴曲「春の海」に就いてだ。もともとこの曲は宮城道雄氏の作曲なんだが、それを女史が提琴のために、編曲したものである。當夜は宮城氏がわざ／＼伴奏といふので、我々の期待は更に大きい。

何故といつてその道の人は兎に角、素人の方では餘りに宮城氏を知らなさすぎる。氏は琴を弾じながらも、琴の世界を出でてゐるのだ、一體琴曲といへば、典雅で優美なところにある。あの人のほそれだけではない。大きさと壯重さを持つて居る。英語のグランドといふ表現は、

傳統的琴の檢校などが持ち合はさなかつた。氏の演奏を蔭で聽いてゐたら、恐らく琴とは思ふまい。ピアノを弾いてゐるのかと思ふだらう。而もピアノはどこか肉感的の響きをもつが、氏の琴にはそれがない。何にせよ氏はわが音楽史上永く特記さるべき人である。

さて「春の海」である。宮城氏の作つた曲をば、女史の提琴のためアレンジして、氏の伴奏の下に女史自ら弾くといふのだから興味はまさに百パーセントの譯である。この曲を琴ではまだ不幸にして、私は聽いた事がないが、曲その者は恐らくは「春の海ひねもすのたり／＼かな」の情景に、陽炙たち、青春盛りなる乙女子の思ひが、表現されて居るであらうと想像される。ところがどうであらう、一度び女史の手にふれるとまるで感じが違つて來る。南國のアカジアの海に燃ゆる思ひを身に秘めた、サツフナの姿を思ひ浮かばせないではおかない。悶え苦しむ赤き思ひが、渾身の力を以て追つて來るのである。この一曲によつて女史の飽までも情熱的な詩人であることが、充分窺ひ得られた私は斷然嬉しくなつてしまつた。

斯ういふ譯でメンデルスゾーンの曲は、女史の得意のもの一つではあらうが、それよりも「春の海」が私にとつては魅惑的だつた。これによつて、永い間の音楽上の私の疑問も解けたや

うにさへ思ふのだつた。

疑問といふのは他でもない。作曲だけが純粹藝術であつて、演奏は單なる模倣ではあるまいかとの疑ひである。だが昨夜の演奏を聴いて分つたことだが、作曲は寧ろ只汽車の旅行案内である。時間表である。之を藝術として活かすも殺すも、演奏者の技倆である。演奏者の持味と解釋とで完き藝術品になるのだといふことが、ゆうべ初めて理解されたのだつた。斯ういへば、女史は私にとつて恩人ですらあるやうに思はれる。いやその前に、今夜招いてくれたN君兄弟に先づ感謝しなければなるまい。

## 人間尊氏

去る三月十四日の日に鳥村民藏氏から、明治座のこけら落しの芝居に招かれた。行つて見ると新橋演舞場見たいなこぢんまりした小屋で、あれよりもつと氣がきいてゐる。感じも良い。少し舞臺が小さいやうだ。一番目に鳥村氏の作「足利尊氏」が上演されて居る。左團次の尊氏猿之助が弟の直義と云ふ役割である。第一私は尊氏と云ふテーマに心をひかれた。尊氏なるものが餘りにも反叛兒扱ひされて居たのに、かねがねから私には異論があつたのだ。と云つて私よりもより史家でない。従來の史家の尊氏觀を覆す材料を持合せて居る譯ではなかつた。

例へばあの新約全書のイスカリオテのユダが、とても悪人のやうに説かれて居る。それはあんまりだと中學に居る頃から私は内心大いに不服だつた。同じやうな考へを尊氏に對して、私はもつて居るのだつた。折も折、信仰篤き宗教生活者としての彼、それに政治家として、理想や功名

にもゆる彼、かうしたものが相争ふ姿を描いたのが、島村氏の戯曲「足利尊氏」である。かねての私の疑ひに釋然と解決を與へてくれたやうな作だつた。即ち尊氏の全人間を現はさうとしたのが、この作のねらひである。つまり彼の内面生活を具體的に現はさうとしたものなのだ。

「神佛も照覽あれ、君を慕ひまつる心の強さでは、堂上家や楠木新田におくれは取らぬ」と自負する彼である。彼にしては大君に弓引く事は到底忍ばれない。併し血氣にはやる弟直義は一途に功名に燃えて居る。もだへ惱んで優柔不斷のやうに見える尊氏も、遂に大勢に引かれて兵庫の浦を目指して尾道の海岸を出て立つ。これが第二幕目である。第三幕は京都清水の金堂である。凱歌をあげて京都に引上げた彼は、又内省的な自己に歸る、叡山に坐ます後醍醐帝の方をふし拜む悔悟の人となる。自分の所業に未來の善果なぞ到底望まれないのをよく知つて居る。又しても深き煩悶の情が浮んで来る。こゝに夢窓國師現はれて救済の道を説く。かくてつひに彼は矛盾懊惱の人である。こんなのが此の戯曲のあらましである。

舞臺装置のよかつたのは、第一幕の淨土寺多寶塔前であつた。一番見處は何と云つても第三幕の幕切れである。左團次の尊氏はよく作者のねらひを理解して居た。直義にふんした猿之助

が一役で夢窓國師をつとめて居たが、共に立派な出来であつた。猿之助の理解の廣さと、達者な藝とをよく知る事が出来た。尊氏を演ずる役者は左團次より外、先づ今日では求められまい。前にも云つたやうに、もとよりこの作は内面生活の描寫である。だから大向ふをうならせる様な派手な見せ場はない。それがこの作の特色である。内心の矛盾と葛藤に苦しまぬ人には、この戯曲は味へまい。松蔭がやつた御台登子の方がもつと活躍したり、又は外面的描寫の藥味をもつと入れたならば、更に面白い芝居となつたのであるまいか、などと私は思つた事である。それにつけても思ひ出されるのは、所謂劇評家の批評である。小山内氏と三宅氏のこれに対する批評を私は讀んだがまるで理解がなかつた。もと／＼私は小山内氏には何の敬意も拂ひ得ないものである。一かど彼は劇界の立者のやうだが、なる程西洋劇の眞似をやる人ではある。でも劇を眞に理解する人だとは、いかにしても考へ得ない。もと／＼輕薄才子流に劇が分るものではない。三宅氏の劇評には今迄相當尊敬して居た。中央公論に連載された「文樂物語」など面白く讀んだものだつた。併しあの批評を讀んだら、まるで内面描寫の分らない人だと思はざるを得なかつた。批評家かくの如し。これではわが劇壇の進歩も未だなかなかだらう。



## さつき芝居

去る日曜は五月十五日、五月晴の上天氣。至極のんびりした氣持で、青葉のもと來訪の友人二三と漫談數刻、はや一日も暮れかゝつた。夕方からは、約もあつたので、なにがし等を誘つて明治座を觀に行つた。左團次、松蔦の一座に幸四郎、猿之助などが加はつて居た。出し物は綺堂の、「箕輪心中」菊地寛の「父歸る」の外、所作事「河獅子」などだつた。

「父歸る」で一番光つてゐたのは云ふ迄もなく猿之助の兄の役だつた。原作は寛の作の中で極めて良い方に屬する。尤も原作者の作品中私などが敬意を拂ひ得るのは、この作の外數篇を數ふるのみなのだが。父は八ツを頭に三人の子とその妻を残して情人と出奔する。爾來二十年香として音沙汰もない。が、思ひがけない頃漂然父が歸つてくる。その母と弟妹とは飛立つ許り喜ぶ。だが兄なる健一のみは喜ぶどころか、親子の名乗りさへしない。親でない、子でないと、斷

然云ひ張る。「お母さんが、マツチの紙張り職が一ヶ月もなかつた時なんか、食べるものも食べられなかつたではないか。そんな苦勞も誰がためなんだ。妻子を顧みようともしないで出て行つた父のためではないか。そんな人になんて、父と呼び子と名乗る義理があるんだ。」と啖呵をきる。飢え死しさうな六十路越した老人に、一椀の食さへ與へようとしな。

之には母も弟妹も返す言葉もない。父は居ても立つても居られない。すごとくと頼りなくこの家を出るより外に道はない。母と妹とは後を附けんとしても許されない。愈々姿が見えなくなる。物を云はないで二人とも慟哭する。わつと許りに泣きまろぶのである。この慟哭を見ては、氷の如き非人情な兄も動かされて共に泣く。我知らず弟と一緒に馳け出して父のあとを追ふところで幕。

兄健一が放蕩遊情なありし日の父を痛罵する處も良い。か程の意地と、固い意志があつたればこそ、父なくも親なくも腕一本でたゞき上げて、今日を作つた彼の面目が見られる。理窟は一々尤もである。だが親は親である。父はやはり父なのである。相遭はざる二十年。而も一滴の涙なく愛着もない。かういふ人間もあらう。それをば如實端的に描き出した原作者の手腕はたしか

に敬服に價する。役者も良い。

だが一番人を動かしたのは、父が去つたあとで、母と妹とが悲痛堪へ難く、只號泣するばかりである。この舞臺効果はまさに百パーセントである。私は人目も辨へないで泣けて泣けて仕方がなかつた。今かうして筆とる刹那すら、其場面を想ひ浮べては、涙滂沱たるものがある。原作ではどうなつてるか分らないが、芝居では、その慟哭號泣をきいてはさすがの健一も暗然として袖で涙をふいて我知らず父の跡を追はないでは居られない。遂に彼も人の子であつた。之で観衆もほつと胸をなで下す。親子の愛は遂に強かつた。この間も蒲田の撮影所長城戸氏が來ての話なのだが、映畫で一番人を呼ぶのは父性愛、母性愛を取扱つたものだと言つて居た。

こんな芝居を見るにつけ、思出さるるわが父の偉である。父はその渾身の愛を私に瀝いでくれた。でも私は遂にその慈愛に叛かねばならなかつた。父の恩愛は逝きましてより、五年十年を経た今となつて始めて、親ひ得るのである。かくと知つて綿々たる父への思ひは「哲學の門」の巻頭に書き記して居る。だが溢るる恩愛をよしや當時覺つたにせよ猶叛逆せねばならぬ私であつた。愛と知りつつ離れねばならず、「絶ち切らねばならぬ」ところに近代人の悲劇がある。

最近贈られた興子と云ふ閨秀歌人の歌の如く「従はぬ子を見る父のまなざしに涙を見たりあつき涙を」と泣くところに、現代人の悲痛なげきがある。

ところでもう少し明治座での印象を書かう。「箕輪心中」は多少の期待をもつて居たのだが、つまらなかつた。同じ作者の「鳥邊山心中」や「番町皿屋敷」などは青年時代に愛好措かなかつたものだ。でも近頃見るとやはり飽き足りない。出て来る主人公の一本氣で純情なのは良いとしても、深さが無い。主人公と云ふのが大抵旗本なのだが、所謂江戸兒はあんなに平面的だと云ふのか、それとも左團次の人となりがあんなものなのか。兎もあれかう云ふのは今の私許りではあるまい。今日では今一步深く突込まねばと思ふ。何だか、もう綺堂でもない、つい失禮な事を思つたりする。併し松蔭の女形がだん／＼板について、藝の光りを増して来るのはつきり眼に映る。殊にあの人の清楚純情の持味が堪らなく私は好きだ。さう云へば水谷八重子などの持囃されるのも、やはりかう云つた感じだらうが、何と云つても松蔭には、八重子に較べられぬ藝のみがきある。

最後の「連獅子」はとても良かつた。幸四郎と猿之助の出物である。幸四郎の踊りは久瀧振

だ。この所作事に白と赤との獅子が出る。「牡丹は百花の王にして獅子は百獸の王とかや」なる獅子の豪快さは、男でなくば味が出ない。こんな大きくて猛々しい獅子に蝶が戯れるところがある。之なんぞは、まことに對照の妙を得て興味盡きない。むかしの人の美感の鋭さを禮讚しないで居られぬ。全く陶醉した事だつた。これだけでも有難いやうにさへ思つたのだつた。歸りには銀座四丁目に出て、キリンビールのスタンドで渴いたのどを濕して家に歸れば、大變な號外である。曰く犬養首相、官邸に於いて、暗殺團の襲ふ所となり遂に絶命したといふのである。人事ならずぎくりとした。まあなんとした事であらう。血盟團の事件以來、流言蜚語様々に行はれて、人心さらでだに不安に襲はれてゐる折から、又しても慘劇である。ちやうど私達が芝居に陶醉してゐる頃それは演ぜられたのだ。歴史的大事件が惹起されたのだ。いかに無常流轉の世なればとて、何と云ふ慌しさであらう。感慨無量云うべき言葉もない程である。

### 「播摩」の愛憎

私は左圖次に對しては特に興味をもつて居るのだが、先達でも演藝畫報からその感想を求められるまゝに、話した事であつた。彼の當り藝たる綺堂物は、二月の明治座で「室町御所」を出して居る。これも之迄幾度も見たが、同じ綺堂物で私にとつて、印象殊に深いのは、「番町皿屋敷」である。

その筋と云ふのはかうである。旗本播摩は未婚の青年武士である。彼は腰元の一人なるお菊と相思の仲にある。位置や階級を超越して、この二人は二世も三世も契つて居る。ところが播摩の母は、年頃の彼に然るべき良縁を探して居る。この話を聞いて氣が氣でないのは、お菊である。あれ程云ひ交したものの、相手の深い胸中に尙一片信じ難いものがある。こんなに上下の隔りがあるのに、果して約束のやうに天晴れ、夫とし、妻と呼ばれるやうになるかは、疑は

れてならぬ。

そこで男の眞意をたしかめる爲めに、家重代の至寶たる皿を一枚割るのである。愛して居る播摩は彼の女の過失と思つて、之をとがめやうとせぬ。ところが仲間の腰元の嫉妬から故意にした事がばれた。斯くと知つた播摩は烈火のやうに怒る。之程信じ、斯うまで許して居るのに疑ふとは何事ぞと云ふので、残りの皿九枚悉く割つて了ふ。ここが此の芝居のやまである。そこが又左團次獨特の味を見せるところである。こんな處に綺堂氏の舞臺技巧の旨さがある。去年明治座のこけら落しにこの出し物が出た。その折島村氏と一所に之を見乍ら「何とうまい大向ふをうなせる事だ」と評し合つたものである。

斯くて播摩は、怒りも解けやらで、とう／＼お菊を殺して了ふのであるが、學生の折にはとても共鳴したものだつた。が今見るといかにその性格の單純さに、私は飽き足らなさを覺ゆるのだ。斯んなにあつさりした反省の足りないのが、江戸人の特質だと思ふが、作者にはもつと突込んで見る餘地は無いのか知らとも考へた。

此の作者は家寶の皿をぶち破つて、疑ふものを殺害して解決して居るが、此處に深い人生問

題が潜んで居る。お菊なる女性にもしも播摩に對する愛着がなかつたならば、かやうに疑はなかつたであらう。愛すればこそその疑ひであつた。又若しもお菊に對して何の關心もなかつたならば、殺す程の怒りもないであらう。つまり「可愛さ餘つて憎さ百倍」である。愛するが故に疑ひ愛故の怒り、まことに悲痛なる人間の矛盾である。而も愛の深刻なるにつけ、その矛盾と争闘は激しさを増す。まことに呪はれた人生ではないか。

オスカー・ワイルドは「憎悪は愛なり」と言つた。私は「愛は憎悪なり」と思ふ。腹かきむしり度いやうな、この悲痛な經驗のないが、この世に人幾許あるだらうか。

兎も角も人間の愛は惱みである。暇令だまされて地獄に落ちるとも悔ひないと言ふ絶対愛はつひに見らるべくもなからう、やはり久遠の愛は宗教にあるのみである。

## 鴨綠江節のおほどかさ

今又私は九時半發の特急列車に乗つて、岡崎までの旅にあるところだ。この一二週間の間にこの東海道線を往復するのが、もう數回である。その度に、或は高木だの、或は西野だのと云つた若い學徒が連れにあつたのであるが、今度は全くの獨り旅、閑寂の氣持をしみじみと味つて居る。車中には來訪者もないし、電話もかゝらないし、臺所の聲も聞えないし、ほんとうに自分の天地だと云つた氣がする。

この間日本大學教務に居る×君と話しこんだ折、鴨綠江節の話が出た。彼は朝鮮平壤あたりに生れた。漫々たる水をたゝえて流れるが如く流れざるが如く、鴨綠江の悠々たる姿を彼は讀んで已まないのである。「山中曆日なき」様な水流である。まことに流れるいかだが、新義洲につくのは、いつの日か分らぬと云つた姿を髣髴せしむるものが、眞の鴨綠江節である。然るにこ

ゝらで聞くそのメロデーはまことに慌しいもので、悠容迫らざる水の流れも、何もあつたものでないと嘆いて居た。

この話を聞いて間もない一昨日だつた。四谷の戸谷床に行つて私は散髪して居た。そこで頭を刈りながらラヂオを聞いたのである。日曜の朝の間だつたので、子供のためのプログラムで某聲樂唱團の合唱があつた。所でそのコーラスの音律である。速いの何のと話しにならぬ。二拍子だか、四拍子だか、そんな事はまるで私には分らないが、疾風迅雷的の歌である。さきの鴨綠江節と思ひ合せて現代世相の慌しさがつくづくと思はれる。これでは國民擧げて神經衰弱にかゝつて居るのではないかと思ふのである。

さう云へば人事ではない。私などもまさにその一人に違ひない。何たる忙しさ慌しさであらう。そしていつもいら／＼した氣持ちをして居る。時に顧みて自ら憐れにも思ふ。

先達でもある友が私に書を寄せた。そして私を評して「權勢をあこがれ、虚榮を追ひ」と、頂門の一針を與へてくれるのであつた。この慌しさ、この焦燥は當に權勢を戀ひ、虚榮を願ふ結果ではないのだらうか。思ひ到つて撫然たらざるを得ないものがある。

もとより名利權勢の夢幻なるを知らないではない。知ればこそ永遠の命を求めて、わが旅の道を獨りで歩いて居る。さるにても斷ち難きこの煩惱である。何も彼も捨て果て、山に入りたと思ふ事幾度びであつた。併し思ふに、悟りはひたすらに遁世した山の奥での專賣でもあるまい。柳は綠、花は紅と知つて、色即是空を觀ずる處にこそ、眞の悟りがあるのではなからうか。

## 思想劇のこと

人生創造社の主催で先達で、三越のホールで、創生劇團の試演があつた。招かれて二十四、五の二日共見に行つた。この一派は林幹氏の率ひる劇團である。出し物は石丸梧平氏の『千手觀音』と『求めよさらば與へられん』の二つの戯曲と、田中智學氏の『俎岩の難』と云ふ日蓮傳の一節をば、戯曲化したものであつた。

石丸氏の兩作は共に、氏の人性觀や宗教觀を戯曲に表現せられたもので、純然たる思想劇である。今の劇壇なり創作界に戯曲作者は相當な數に上るであらう。また舞臺裏に通じて、役者の柄を見分けたり、大道具小道具のつかひこなしなど、達者な人も乏しくはあるまい。だがその思想的背景はと云ふ段になると、淋しい氣がしてならぬ。かゝる日に石丸氏があるのは嬉しい事である。即ちその思想的根柢に、光りと異彩とを見せて居るから。

併し思想劇であればある程、舞臺演出になると一般の難しさは免れ難い。例へばあのメーテルリンクの諸作を考へて見る。かのチルチル、ミチルが出て来る「青い鳥」はさうでもあるまいが、「タンターヂルの死」や「ちん入者」や「アラヂーンパロミデ」などを演出したらどうであらう。ずつと以前日本でも誰れか上演した事があるのだが、私は夫れも見なかつたし又滞歐中見る機会もなかつた。何にしても大變難しいものであらうと想像される。

石丸氏の作はまさにそれではなからうか。氏は二つのうちで、むしろ「千手観音」の方に力を入れて居たやうである、これは氏の深い思想を象徴したもので、着想はたしかに面白い。だいいち千手観音と云ふ言葉からして、非常に象徴的で面白いではないか。従つてこの戯曲は大變示唆と暗示に富んで居る。併し舞臺を見た眼には、却つて「求めよ與へられん」の方が面白い。何故と云つて變化が多いし、それだけその旋律が觀衆の心をあかせない。

これは獨り君の難と云ふ事は出来ぬが、總じて新劇には音樂的要素が取入れられて居ない。綜合藝術としての劇には、音樂的要素はなくて適はぬものと私は思ふのである。それは餘りに私が、傳統のかたに捕はれすぎた考へであらうか。

### 水谷八重子の演技

水谷八重子と云へば何しろ松竹の弗箱だと云はれる位大した人氣である。その眞面目な藝風と純情の持味とは見るべきものがあるとしても、何でそんなに騒ぐのやら今迄私には分らなかつた。去年の夏だつたか「演藝畫報」から松蔦論を求められた折に、私は思つた儘こんな風に書いておいた。八重子の藝は要するに女學校の學藝會程度のものだと。別に非難を打つ程の所はないにしろ、河合や喜多村等と並んで出る場合には、とても比較にならぬとすら思つて居た。

ところが今月の東劇に於ける彼女の所演を観てから、俄然私の考へが變つて來た。初めて彼女の眞價が解つたやうな氣がするのである。東劇での持役は第一の「お夏清十郎」に於けるお夏次に「酒中日記」に於ける大河校長の妻お政、それに今一つは「港の灯」の中のヒロイン文子と云ふ三役で、斷然女優仲間の王者振りをを見せて居る。その持役に幅をきかして居る許りでな

く、藝の内容賞録共に申分がない。

『お夏清十郎』は眞山青果氏の原作で、脚本の性質上、舞臺技巧で特に色つぼさを出すのに苦心されて居た。歌舞伎に慣れた目には、それがいかにも態とらしい感じのせぬでもなかつたが八重子の娘々しい戀心の表現で先づ我慢が出来た。併し彼女の藝の冴へを見せたのは、お夏の氣が狂つてからの演技である。清十郎が死んだときくや、急に氣も狂ひ心も轉倒してけらげらと大聲で笑ひ出した。そのところ等は正に満腹である。

『酒中日記』では女形や女優の働きどころは先づないのだ。どちらかと云へば、井上正夫の出し物である。それなのに、亭主役の井上を活かすと共に、自分の役としてもお役目御苦勞とだけでは濟まない素晴らしさを見せてくれた。その扮装と云ひ、そのしぐさと云ひ、天晴れ校長の妻になり切つて居た。殊に貧苦に闘ふ貞淑温順の女房振りである。夫大河今藏は、義理の母の罪を庇ふため、拾つた金をかくして居る。勿論妻にもあかさない。その秘密がふとして妻に依つてばらされた。「夫のためならば泥棒の汚名も、かまはない。牢死も厭はない。何故獨り良心に責められて惱むのか、恨らみでござんす」とかこちなげくのだ。誠實神に徹すると云は

んか、その眞剣さが物凄く許りである。まことに至藝である私は只打たれて、泣いた。

『酒中日記』が井上正夫の當り藝なのは云ふ迄もない。彼に於て買ふべきはその藝の巧さではない。その深さである。どこかしら、その思索的風格が、私は好きである。舊劇ならば、先づ中車と云ふところだらうか。まだ私が學生だつた頃、井上のこの芝居を京都で見たのが、最初であつた。それから彼に非常なる關心を持つて居たものだつた。益々味の深さを増して居るのが嬉しかつた。

但しその劇全體の演出に就いては、多少の異論なきに非らずだ。大體この作は自然主義全盛期になつたもので、原作者はその派の驕將である許りでなく、『酒中日記』はよきその代表作として知られて居る。自然主義とは、云ふまでもなく、理想主義でも乃至浪漫主義でもない。また人道主義の作品とも違ふ。人間の弱さ、醜さがあるが儘に描かうと云ふのである。禽獸主義である。没理想主義である。現實暴露が得意なのだ。

この作品はどこが、それならば、自然主義的なのか。勤続三十年の徳望高い校長が、没義道の母に引かれて、つい罪の奴となるところが、それであらう。この罪は彼を身の破滅に導くの外



なかつた。妻は乳兒を抱いて水死した。彼もその後を追つて海に身を投げた。ところが我に歸つて見ると、大島の海岸である。今は死する勇氣もくちけて浮世忘れたわびしい月日が經つて行くのである。かゝる日に戀心が芽生へ、又本能の奴隸となる。と云つた作意だつたと私は記憶する。

が、今月の東劇に於ける演出はこんな風な自然主義的色彩は見られなかつた。主人公大河校長が所謂罪を犯した後と云ふものは、まるで性格が一變した。否絶えずおびえてゐる。見るからに何か大きな秘密をもつてゐるやうである。而も良心の苛責に堪え難い風情である。さうなつては弱くして醜い罪に陥る、憐れむべき姿ではない。むしろ罪に泣く人の子の姿が浮かぶ。崇高なる宗教的氣持ちでさへあるのだ。妻の死に依つて、その感じは益々深められる。愈々最後の場面になつて、兒童を前にして、校長は自分の罪惡非行を訴へる。泣いて告白する。可憐にも、引留める子供達の袖を拂ふて、罪を犯したものゝ歩むべき道に、就かうとするところで幕である。薬が少々利きすぎでゐると思はれぬでもない。かくて原作の自然主義的作風どころか、大きな道義的芝居となつてゐる。否宗教劇ですらあると思はれる。演出で、かうも違ふものか

と思ふのだつた。

## 人形劇と宗教

私とこの大學の藝術科では年々藝術祭が催されるのだ。和洋音樂の演奏は勿論演劇の上演や映畫の上映など、色とりどりに取合はされる。去年の秋の催に人形芝居が上演された。内山憲堂君がその一切を擔當するのだつた。同君はまだ學生（本年三月卒業の豫定）ではあるが、この方面では知られて居る。著述もある。その機會に始めて私は其の演出を見た。舞臺と云ふのが幅三尺奥行二尺高さ五尺位ひもあらうかと云ふ黒布張りの箱なのだ。その正面の中央位ひのところに汽車の窓見たいに開いて居る。それが舞臺となる趣興である。

この舞臺の格好に依りても分るだらうが、人形芝居と云つても大阪文樂座のそのやうに、操人形ではない。キニヨールと云つて指遣ひ人形なのだ。内山君はそれで窓の下にかくれてゐて、下から指でもつて、人形の出入には勿論凡てのアクションを演ぜしめる。彼はこの人形を

動かす許りでなく、幕の上げ下ろし、舞臺照明、擬音や音樂など一人でやつて退けるのだ。全く一人で八人藝である。五省か六省の大臣を一人で兼攝するムツソリニ見たいなものだ。その忙しさも想像に餘りある事だが、それだけに破綻もない譯だし統制の上には心配が要らない。こんな次第で仕懸けも装置も至つて簡單なものではあるが、若し夫れその劇的効果の素晴しさは驚いた。

上演の取材は小學校讀本にある「猿の孝行」とか云ふんだ。親猿と兄弟の猿とが先づ登場して遊んで居る。母猿なる猿は弟猿を寢せつけると、兄猿は野に遊びに出かける。その間に夕御飯の用意をしようとする處をば、先刻からすきを狙つて居た獵人が一發ずどんと放つ。物音に驚いて兄猿が歸つて来る。母と呼べど返事がない。内を外と探して居るうちに獵銃のさきに擔がれて行く母猿の屍體を見付けて泣きまろぶ。寢て居る弟猿をゆり起して、見えつかくれつ後について行く。

獵師はわが家に着くと母が待つて居る。大獵があつたので、さも得意に手柄を慢れば、いつまでも止めさうにもない殺生を母はむしろ嘆くのである。晩の食事も済んで猿の屍をころがし

た奥の一間で寝に就く。兄弟の猿達は今やよしと、手さぐり屍體をさがし出して手の温みで息を返さんものと、夜を徹して、介抱するのである。夜が明ければ、危険を恐れて、又次の夜にと云つて立去る。その始終の様を見てゐる人間の親子は暗然として涙を噓られる。猿人は動物にも、斯くまで深い親子の情を今知つて、爾來殺生を思ひ止ると云ふ筋である。

私はまだ讀本を讀まないから分らないが讀んで見ると極めて有ふれた孝行談で、餘り面白くもなさうだが、芝居ではなかく左に非ずだ。つひ思はず目頭の赤くなつたのは、一再に止らなかつた。その夜の種々の出し物のうちで一番鮮かな印象を残して居る。ちやうどちの子供も見物に来て居たので、歸つてから、「今夜何が一番面白かつたかい」と聞いたら、人形芝居が一番良かつたと答えたものだ。つまり子供にも解つて面白いし、又大人にも深い感動を與へる。之は大したものだと感嘆久しうせざるを得ない次第だ。

そこで思付いたのだが、之こそ宗教々育に屈強なものではないか。今夜の上演に刺戟されたものか、藝術科に人形劇研究會が出来た。その發會式の席上、この旨を語つた。すると演劇

史家飯塚友一郎氏の話では本來歴史的人形劇とは宗教々育に利用されて來たものであつたとやら。むしろ當今兩者が離れ々々になつて居るのが不思議だと云ふのである。して見ると、私が兩者を關係づけやうとしたのは謂れない事ではなかつた。

文献に依ると人形劇の發生に於て世界最古のものは印度ださうである。印度人の信仰する處に依れば、操人形は人間の生存以前から、神と一緒にこの世に住んで居たといふのだ。否彼等傳説に於ては、操人形が神から生命を與へられだと思ふのであつた。又彼の地では人形劇の舞臺監督の名稱と、聖像を陳列する僧侶とは同じ名稱で稱ばれるのは、宗教と人形劇との關係を考ふるものに取つて、大きな暗示であるやうに思はれる。でなくともビルマ邊りの人形では上演の初めには、きつと一つの人形が祈禱師となつて現はれる次第が傳へられて居る。

操人形や指遣ひ人形の外にやはり人形芝居の一として數へられるものに、影繪芝居がある。この影繪芝居もその源流は遠いものである。原始人は彼等が理解出來ないものゝ一つとして、「影」を考へた。この影に對して尊敬の念すら持つのであつた。影は動く許りでなく、消滅變化がある。影は彼等から逃れるかと思へば、又彼等を追ふのだ。それだから彼等に取つては影

は單なる影でなく生物その者である。果ては彼の幻想は當じ次第に神秘化し、遂には自分の影は自分の靈魂であるとすら信ずるに至つた。かうした氣持は影繪芝居の起源となる事は想像に難くあるまい。かくして我等はその影繪芝居の源流をばジャバ島に發することが出来る紀元七十年頃にはこの島に立派に存在して居た事が證據立てられた。

そんなに遠い昔の文献を詮索しなくとも、よく我等が芝居で觀る「廿四孝」の「十種香の場」を考へて見る。八重垣姫が勝頼の繪像の前で切りに香を薫じて居る。

「魂返へす反魂香、四向せんとてお姿を繪には描かせはせぬものを」  
とのかき口説きを見れば、古事傳説は知らなくも繪像を描いて反魂香を薫すれば魂が歸つて來るとの信仰が抱かれてゐたと想像出来る。すると繪姿や四向の供養のなかに觀念された宗教性を否む譯に行くまい。こんな考へから影繪芝居となり、そこに宗教性の包藏されたと想像するのは無理ではあるまい。

希臘からの發見物のなかに神を表徴した偶像がある。その偶像をとりまいて人形が踊つてゐるのだ。更に今日に於ても人形劇が劇場許りでなく、寺院の内に於ても行はれる處を見ると、

やはり濃厚なる宗教的色彩を看過出來まい。

希臘で神の偶像の周圍で人形達が踊つてゐると云ふのは、面白いことだ。天照大神が、天の岩屋に閉じ籠らせ給ふた時に、その御前で天鈿女命が歌舞されたとの傳説が想ひ出だされる。つまり神意を慰め奉るために、音樂舞踊を當時の人達は知つてゐた。既にそうだとすれば等の音樂舞踊が後に劇化するべき運命も考へられるし、今日に至るも尙舞樂が神高祭事に用ひられることでも理解される。併しここでは、演劇その者よりも、更に局限して人形劇に限つておかう。

わが國で人形に對する宗教性を見出すものとしては、先づ埴輪をおさなければならぬ。應仁天皇の皇后日葉酢姫がおかくれになつた折、野見宿彌が埴輪を用ひたと傳へられる。これは人形をして人間に代らしたものであるのは、云ふ迄もない殉死者の代りに人形を用ひる民族は何も日本に限つた事ではないが、この埴輪思想と云ふものは考へて見るとなかく興味が、盡きぬではないか。古代人の人間的思想感情の湧れを見る事も出來たし、又その豊かなる空想をも偲ばれる譯である。日本の埴輪には動く人形までは考へなかつたらしいが、埃及では殉死者

の代りに動く人形を用ひた事が、その發掘品によつて見出された。

埴輪をば人形劇と關係つける事は勿論出来ないが、只人形のなかに靈を認めやうとした片影が見出されるのである。別言すれば古代人の觀念に於て認められた人形に於ける宗教性をば考へられるのである。

我國に於る人形劇の源流となすべきは、それからすつと後の事であらう。源流とか遠祖など云ふ事の考證を抜きにして、先づ考へられるのは傀儡(くぐつ)である。傀儡子に就ては種々の説がなされて居るが、それ等に對しての證義立ては専門でない私のよくする處ではない。

春雨や樂屋をかふるくわいらいし

なる句によつても知られる通り傀儡子は首に箱をかけて人形を舞はしながら町から町、村から村へと流して歩いたものだつた。之が地方巡業の便宜上之がその頃興つた浄土宗と結んで日本國中を巡り歩くのだつた。こしに人形劇と云ふ教との提携となつた。ここでは併し人形劇が宗教を利用した或は宗教が人形劇を利用したと云へやう。それで人形劇その者に於る宗教性を主張するためには、尙考案の餘地があると云はねばならぬ。

とは云へ何にしても私は以上に於て、人形劇と宗教との深い因縁をばざつと頭に浮かぶままに書き並べたのみである。そこで私の考へなのだが、歴史的に見て、こんなに因縁残からざるものがあるからには、何かしろそこに特殊の事情や謂れがなくて協ふまい、と斯ふ云ふのである。詳しく云へば人形の上に存する特殊性が何處から宗教の平質に觸れ合ふ點があるのでないかと云ふのだ。

第一考へられることは人形は子供の喜ぶところのものである。人形の何が彼等子供達を喜ばせるか。他でもない、夫れは人形のもつ奉想性である。人形には寓意があり誇張があり、剩つさへ怪奇的ですらある。これらの諸要素は小兒等の空想を喚らすにゐない。空想性は果ては神秘的色彩にまで展開する。それに就て私は宮崎燁子女史から面白い話を聞いた。

と云ふのは斯うだ。女子の實家柳原家に遠い先祖から傳はる人形が秘藏されてゐる。何でも天皇からの御下賜とやらで、由緒付きのものださうである。で勿論着附かされてある。それも春夏秋冬四季折々の着物が人間並みに着せられるのだ。この人形のための着物として拜領のも

の尠くないと言ふ話した。それ許りでない膳部まで朝夕供せられる事になつて居る。女史が伯爵家にまだ居られる間は皆女史の大事な役目の一つであつたさうな。

女史がまだうら若い娘時代に易者のやうな人がふらりとやつて来た。娘なる女史に向つて、  
「あなたは嫁いでもきつと家に戻つて来る。あなたにはうちに引張るものがついてゐるか  
ら」

と云つたものだ。きかぬ氣の女史は

「何そんなものがあつたし、そんな事があらう筈がない」

と高をくゝつてた儘それなり忘れてゐた。後某家に嫁して幾年ならずして家に歸り更に伊藤氏の夫人となつて又伯爵邸の人とならねばならぬ身となつた。こんな再度の経験は女史をして往年の易者の言葉をば今更のやうに思ひ起こさしたと女史は語るのだつた。

そこで女史はこんど宮崎氏の許に行かれる時にはこの人形の代りをば携へる事を忘れられなかつたさうである。このやうな怪奇な物語りはこの人形許りに就てもまだ種々まつつてゐるので、女史は靈魂の存在をば、そんな事よりしても否定されない。既成宗教は何れもが、女

史の心を悔すに足りないが露の存在を否めないからと云ふので、降靈術破究の熱心な會員であるのはさうした因縁に由るのださうである。

この人形に就て更にボーの小説にでも出て來さう怪奇な話を物語られたが、このやうな傳説やローマンズは古來數限りもない只荒唐無稽なこととして徒らに却けられないと私は思ふのである。それらによつても、人形のもつ空想性を擧げ得るであらう。空想的であればこそ様々の物語を生む。果ては怪奇となり神秘性ヲ有するに至る。ここに人形と宗教との連かりがある。

由來現實の世界にのみ止るならば、宗教はない。その意味で宗教は浪漫的である。否ローマンチズムの極致が宗教だと云はれるやう。さればこそ偉大なる文學も美術も悉く宗教藝術ではなかつたか。佛教に於ける大藏經の三部に就て私は斯う思ふのだ。律藏は法律道德であり、論部は哲學であり、經典は文藝的創作であつた。餘り多く讀まないから知らないが、私が讀んだうちで殊に感激の深かつた無量壽經や壽量品など世にも素晴らしい戯曲と思つた事である。果してさうであるならば、ここいらからも、宗教と演劇との内面的交渉が考へられないだらうか。だとすると空想豊かな人形に宗教的感激が具現されるであらう事は極めて自然ではないか。

人間劇と宗教との交渉は斯くしてその本質の上から十二分に裏附けられ得るであらう。  
従つて宗教々育に人形劇を取入れる事は何も利用云々の功利性に出でなくも、むしろ本質の命令ではないのか。否その運命ではないのか。にも拘らずそれが現代には全く閉却されてゐる之れは又一體どうしたと云ふのだらう。理由は極めて簡單である。蓋し現代の宗教生活には論議はあるかも知れぬ。併し行がないのだ。實踐がないのだ。否更に端的に云ふならば宗教の感激がないんだ。感激なき處に創作はない。即ち藝術の現はるべき筈がない。現代の所謂宗教が人形劇に就て想倒だにし得ない理由はそこに在る。

世相雜感

## 煩悶解決法

私達の少年期から青年時代にかけて、煩悶と云ふ言葉がむやみに流行したものだ。日露戦争後の財界恐慌に伴ふて世間一體厭世的空氣に支配されてゐた所爲もあるのだらう。そんな時代思潮に育てられた爲めなのか、煩悶をもつてゐる事が、むしろ青年の誇りでさへあるやうに思へるのだつた。人生に對する深い疑惑のため懊惱して、遂に華嚴の瀧に飛び込んだ青年もあつた。私などはその青年に對して尊敬の念さへ禁じ得なかつたものだ。自分等の高等學校の先輩であつたと知つて、その遺稿を出版しやうと企てたりした事もある。

近頃は非常時だと云ふものの、餘りかう云つた言葉を聞かないやうだ。よしや非常時局でないまでもマルキシズムの煉獄を通つて來て居るので、現實に對する認識は深刻を極めて居るのは、云ふまでもない。現實社會の苦痛や辛慘に對する感覺は到底その頃と較ぶべくもないので



ある。とすると、やはり煩悶などと云ふのは浪漫的の語にすぎないのかも知れぬ。かと思へば近代明朗色だのスマートなどが喜ばれる。一方には親子心中や瓦斯自殺が流行し、三原山が繁昌すると云ふのは受取れない話である。が、考へて見ると、つまり「凡てが然らずんば絶無か」と云つた風に端的になり、切端つまつて来たのでもあらう。

だから、今更煩悶解決法もないのだが、煩悶の必要のない人は勿論讀むまでもあるまいし、そんな事は一世紀前の殘骸だと笑ふ人は笑つて良い譯だしするので、過ぎし日を思出すよすがともして、漫談のつもりで聞いてもらい度い。

何時かしら私は何かの學生の集りにこの様な事を話して、煩悶解決の第一の方法として風呂に入れと勧めたものだ。すると一學生は起つて「先生風呂に入るには五錢なくては入れません。それだけでも居たら煩悶なんかしやしません」と云ふのだ。それには返す言葉もなく、一場のナンセンスには違ひないが、之に依つても時代急迫の世相を知り得たやうな次第だつた。それから一昨年だつたか、ラヂオの放送で「女性の爲めの哲學」を放講した事がある。その折同じやうな事を云つたら、伊香保と熱海の温泉宿から御禮状をもらつた事もある。先様では温泉奨励

とでも感違ひしたのであらう。

兎も角私は煩悶解決の法として二つに分けてゐる。と云ふのは、感覺的解決法と智的解決法の二つである。感覺的の第一段は先きに云つた風呂に這入ることだ。煩悶と云ふことは、同じ問題を何時までもクヨクヨして居ることだ。だから之は氣分を轉換させねばならぬ。感覺的解決法の語がまづければ生理的解決法とでも云はうか。詰り氣分の轉換を計る意味で風呂に這入ることは非常に役に立つ。私などは非常に風呂が好きであるからなのでもあるが、風呂に這入るとすると良い想ひつきをする場合が多い。縦んば想ひ着かなくても風呂に這入ると、きまつた様に考へて居たことをびたりと、方向轉換させることが出来る。それから次の段階になると、少し金が掛かる。活動寫眞を見ること、芝居を見ること、音樂會に行くこと、などだ。之も氣分の轉換に良い。もつと大仕懸に許されるならば旅行だ。それ等は皆氣分の轉換と云ふことが第一の眼目に置かれて居る。

次に智的の段階になると、日記を付けることだ。凡そ煩悶とは何の煩悶でも、先きに云つたやうに同じ問題をばめぐつて、そればかりくよくよと屈詰するのだ。それを日記に付けると

どうしても其儘同じこと許り書けるものではない。それで日記を書くとき自然に筆の展開から、次第に頭を進展させて段々、分折して行く。すると今迄煩悶の種であつたものが煩悶でなくなるものなのだ。例へば今サラリーマンが百圓の金が欲しいとする、其爲に其金が出来ないと云ふことを非常に煩んで居る。之を日記に書くとなると、其百圓の金は何の爲に欲しいのか、何にそれを使ふのか、親が病氣の爲に欲しいのか。誰かを身請けする爲に欲しいのか、親の爲に必要ならばどうしても遣らなければならぬ、併しさうではなくて享樂の爲ならば今の身分として百圓を必要とするその妥當性を考へて見るであらう。其煩悶が果して妥當性があるかどうか、吟味をして見る此必要がある。煩悶の内容を検討すると妥當性を持つて居るが、縦んばそれが道徳的には妥當性を持つて居つても、今の社會的信用、今の自分の經濟的生活、今の客觀的情勢から其百圓の要求が果して妥當かと云ふことを自づと考へるに至るであらう。するとそれが今の自分としてはどうしても無理である。無理なことを願つて煩悶も愚かな事である。子供が一躍星の世界に行かうと云ふことを考へると同じことであるから、さう云ふ煩悶はしない方が宜い、若し百圓が出来ないとするならば、それではどう云ふ風にしたら宜しいかと云ふ方法論の問題

題に自然移る事にならう。さう云ふ風に段々検討をして行くと煩悶が煩悶でなくなる。かくて書くことに依つて、煩悶の解決が出来来る。それでも出来なかつた時分に始めて宗教だ、哲學だと云ふことになる。

併し先づそんなことで大抵の煩悶は解決出来る。だから書くとき云ふことは非常に宜いのだ。書かないで居ると、同じこと許り考へて、頭の發展がない。書けばどうしても同じことを書かないで、發展せざるを得ない、發展すると自ら纏れた糸の解けるやうに段々解けないで居ない。幾何學の問題を解くのも、代数や方程式を解く場合でも、唯抽象的に頭のなかで考へて居つては駄目である。之を紙の上に書いて、種々手を動かして睨めつこをして居ると問題がとけて来る。そこで幾つか結論が出て来たものを又眺めて居ると、此間に一つの一貫した聯絡と統一とを見付け出す。かくて十位の結論があつたものを、更に整理して五つぐらゐにまとめることが出来る。其五つものを又幾日か後に考へると云ふと、今度は二つに到着する。其二つは纏て一つになると云ふ風にするのだ。之は私の煩悶解決の方法であるが、同時に又一つの思索の訓練法なのだ。

## 祖國美の認識

高須芳次郎氏を中心にして新東方協會が生れた。東洋趣味や日本思想の研究に耽る一方、他方では「日本時代」の通俗雑誌を編んでその大衆化につとめやうとして居る。又北玲吉氏は「祖國」を發刊して祖國主義の普及を計らうとして居る。只二氏の企てとしてのみ私は、之を看過する事が出来ない。徒らなる傳統の牙城に籠つたり、或は單なる國粹主義者ではなく、近代思想に洗鍊された人々に依つて、祖國の主義文化が今更に説き始められて來たのは、まことに有難い事である。豫ねて私は日本の文藝復興の頃と云つてゐたのが、愈々實現されさうで、とても嬉しい氣がする。

今夏東北旅行からの歸るさ、今一度仙臺で「日本女性美禮讚」を放送したが、これとてやはり祖國文化に對する自覺だと思ふ。そのなかで私は話すのであつた。よく近頃婦人の洋装が流行る

或は支那服を好んで新しい女性に着やうとする。何で艶でやかな日本の服装を捨てて、無味無風流な洋装をしやうと云ふのか、私には分らないのである。私の知る限りでは、恐らく日本服、殊に日本婦人の服ほど繪畫的効果を收めて居るものは、他にあまりない。色彩の豊富なる、圖案模様巧みなる、私はほと／＼感嘆して居る。例へば極簡単な服装である、ゆかたを取つて見るが良い。少しも色彩を用ひて居ないが、艶麗なる効果を得て居る。何でもない事のやうに考へて居るが、まことに素晴らしい技巧ではないか。

若し今東西女性美の比較を論ずるならば、肉體美に於て我が國の婦人は一步を彼等にゆづるとしても、服装美に於ては萬丈の氣を吐く事が出来る。似合もしい洋装に驕ぐのは、まことに以て不見識千萬の話である。併し何にしても活動に不便なのは、争はれない。現代生活に適應せんとするには大なる缺陷をもつて居る、それは日本の家屋建築とすこしも變らない。やはり和服は木造作りの内の疊の上の服装である。

かう私は日本女性をその服装の上から禮讚したが、私が禮讚して己まないのは、その柔かい美しい性情である。日本女性の氣立てとして、私はいつも近松の劇に現はれて來る女性を思ひ

出す。夫の目をばなさんと夜な々々夫の知らぬ間に観音様に願をかけやうとする澤市の妻お里の心が、即ちすべての日本婦人の心であらうと思ふ。「きはれたりと云ひながら」夫の愛を全からしめやうとする半七酒屋のお園の犠牲的精神は、又日本女性の心情であらう。かくて貞淑や貞操と云ふ語義は、日本婦人のみが理解し得る道徳である。と云つて、私は只盲目的愛や服従のみを、要求しやうと云ふのではない。その深い愛の前に、己れを虚しうして顧みない心を貴いと思ふ。彼女等のかうした絶対愛は、宗教の世界まで参ぜねば己まない。わが女性の情操は、宗教の祭壇に僅かに一步である。これが私の放送講演のあらましであつた。

それが済んで後仙臺から鹽釜へ電車でもつてかけつけた。鹽釜から船に帆をかけ波風にゆられて、松島に志した。蕉翁が近江の湖、洞庭西湖の勝と云ひたりけん松島の美しさをあかづながめて、その夜歸京の車に投じた。愈々久しぶりに都の家に入つたのは月の下旬であつた。

## 論理の悲哀

昨日は「哲學史」の講義の時間があつた。出て見るといきなり一學生からの質問である。「先生、論理の悲哀つて何ですか」と云ふのである。さき頃出版した「生活の哲學」のなかに、私が論理の悲しみを訴えて居るのが、分らないのださうな。そんな事を云ふやうだつたら、哲學の研究なんか、よした方が良からうと云ひ兼ねまじき彼の口吻である。いかにも尤も至極な話である。斯かる心境なので天理教入信となつて現はれたのかと、彼は聞くのであつた。まことに剴切な質問である。講義はそつちのけにして、これらの問題に就いて私は二時間近くも語つた。

顧みればもう十幾年の昔である。大阪は道頓堀のさるカフェーで文藝談話會が開かれた。近頃のやうにカフェーの黄金時代ではないので、同好の士が相寄つてお茶を飲みながら、話をす

るには屈強な所である。その會に、君一つ何か話して呉れと、私に頼んで來たのは、M新聞社に居た人で、今も大阪に居る俳人入江來布君だつた。その折に選んだ題が忘れもせぬさきの論理の悲哀であつた。ほんのかりそめに附けた題ではあつたが、當年より今日に至るまで、かうした思想の片影が、私につき纏ふて居るやうに思はれる。

私達の青年の頃は所謂カント學派の華やかなりし時代である、まだ高等學校に在る時分にヴンデルバントの著述などを見附け出しては、覺束ない獨逸語で讀み耽つたものである。それから、ずつとその學派の感化と影響とを受けて來た。その學的態度の峻嚴さと、論理的反省の精到さには、只々頭を下げるのみであつた。とは云へ、他面彼等の思想學說にあき足りないとの感じは、またおふべくもなかつた。さうは思ふものゝ、堂堂たるその體系組織に對しては齒が立つ道理もない。

こんな氣持の儘、學窓を出て一年許りは經つた。すると圖らずも、社の仕事の關係で、理博小倉金之助氏に會つた。氏との交遊はこれから始まる。今でこそ音信だに打絶えて居るものゝ氏は私に與へるところが誠に多かつた。カントに對するルツソーのエミール見たいなものだと

さへ、私は思つて居る。氏の數學界に於ける地位は今更云ふまでもない。また氏の學問に對する眞摯な姿は、昨年出版された『數學教育史』に於ても十二分に反映されて居る。でもそれだけならまだ問題にするに足りない。それで居て、文藝や美術に對する造詣や鑑賞眼は、天晴れ一家をなして居る。その氣分、その肌合、その性格など全くの藝術家である。冷嚴なる學的要求と、奔放なる藝術的性情との相尅に絶えず惱んで居る氏の姿が、涙ぐましくも貴く思へるのである。

氏は云ふのである。「眞理のための眞理、學の爲の學は結構である。有難いことだ。でも生活を抜きにした學問が何だ。生活に觸れない眞理に何の意味があるのだ。」と。「論理の悲哀」なる私の講演は、それから間もない頃だつた。

そこで謂ふところの「論理の悲哀」の意味を語らう。

誰も知る通り、新カント學派は、殊に西南學派は純論理的なのを看板にして居る。その論理の周密にして精到な學風が、人を引附ける所以でもある。又カントの批判的精神の徹底とも見

られる點なのだ。カントが價值と實在とを分ち、理想と現實とを峻別したところなどは、頭の牙へが偲ばれる。かくて彼に於ては眞理が價值である以上、それは實在と何の關はりもなき彼岸の妥當界より一步を出でない。

かくの如くんば遂に、哲學は形式の吟味のみ終止する外はないであらう。概念的思辨が結局の職分である。かくては良く行つて、中世時代の煩瑣哲學を再現するのが、落ちではあるまいか。哲學が既にして學問的要求を満さんとする以上、又學問的要求が論理的體系を求める以上、論理の徹底にもとより異存のあらう筈はない。だが、そこに問題は盡きて居るのであらうか。ある人々の要求はそれで満されるでもあらう。が、私にあつてはさうは行かない。けだし私に於ては、哲學は宗教の代りに求められたものである。崩壊した信仰をば、何等かの形に於て、再興復活しなければならなかつたのだ。そこに現はれたのが哲學だつた。だから新カント學派には頭は下がりつゝも、満されない或者を感じないでは居られぬ譯だつた。

かゝる日に小倉博士のさきの喝破である。今更のやうに生命を思ひ、生活を偲ぶ機縁が與へられた。ベルグソンの創造哲學やウイリアム・ジェームスのプラグマチズムに對する思慕の念が

新に頭をもたけて來た。即ちこれは大學に於ける講義となつて現はれた。と云ふのは斯うだ。間もなく私は大阪の生活を引拂つて、東都の教壇に立つ身となつた。選んだ講義題目が一輓近ヒユーマニズムの思潮」と云ふのだつた。つまり、ベルグソンやジェームスやシーラーなどを中心にその哲學思想をば探り求めんとするものであつた。

かうして一年二年の時が流れた。彼等の生命至上、乃至生活中心の考へには、心引かれるものがあるにはあつても、論理的整頓さには、いかにも同じ難いものがある。カント學派に在つては形而上學は哲學の限界から驅逐して顧みないのに、ベルグソンが實在を躍動する生命だと言つて、哲學の任務をば直觀的把握にありとするあたりは、共鳴禁止難いものだつた。でも單に直觀で良いと云ふならば、それは詩歌ではないのか。宗教と異るところもないだらう。斯う云つた點に、學的反省の足りなさを訴えざるを得ない。

で私の哲學思索の課題は、カントとベルグソンをば、いかにして融合止揚するかと云ふことになつて來た。その融合乃至解決の地點を、ヘーゲルの辯證法に發見したと云ふ譯になるのである。論理の悲哀とは、即ちカント哲學に對する不滿の表現であつた。形式のみに没頭する論理

への反感であつた。内容なき抽象の論理、動きの取れない静止不動の論理への呪ひであつた。それならば、生命の發展、矛盾せる生活をその儘の姿に把まうとする辯證法の論理は、私にとつて救ひでなくて何であらう。

### 塞翁が馬

これはホールで拾つた話である。Kホールかに今この界限の王者O君が居る。まだ年齒五々の春に届かぬ若さである。素晴らしい伎倆の持主として知られた人ださうな。彼はK大學豫科に在る頃、放蕩で身を持ちくづし、型の如く勘當となつた。何しろ某控訴院長を父に持つのである。この破目に陥るのは無理もない。ところが遊蕩華かなりし頃に習ひ覺えたダンスが、今はパンの資料になつて結局、身を立て、居るやうな始末のみならず、王者としての彼は月収千圓を下らないやうな譯で、却つて父君より豪氣な有様である。何が幸になるか分らない。「人間萬事塞翁が馬」とは、こんなのを云ふのか。

だから子供の將來に就いては無暗と氣にするものではないやうだ。氣にするところが、又親心

とても云ふのもあらうけれど。さう云へば斯んな話もある。私のうちで毎月新進學士の集り「山谷會」なるものがある。先達ての會に淺草で評判のサトウ・ハチロウ君がやつて來て淺草漫談を話して呉れるのだつた。

このS君はまだ中學に居る頃不良性を發揮して、父なる紅綠氏のもとから淺草へ飛出してつた。爾來こゝを根城として、彼此放浪十年の月日が経つた。勿論いかにその間、父や母の惱みの種であつたか分らない。その代り淺草の凡てに亘つて何から何まで精通したものである。活動小屋の内容やその變遷は云ふに及ばず、人事の推移から店舗の開閉、價の高下から、品質の如何など細大漏らすところがない。

宛然「淺草學」(?)の體系をなす程、精到該博を極めたものである。私などの哲學上の知識など知れたものだ、と思ふ位であつた。而もこの、ど偉い知識はもとより請賣や借物ではなかつた。彼の生活と體驗との結晶である。見得や伊達ではなかつた。道學者流にはいかに批判の餘地があらうとも、淺草は少くとも、彼にとつては生命その者であつた。

さればこそ、この知識は俄然光りを放つて來た。彼S君が今日の文名をかち得て、人氣者と

なりスクーとなる事が出來たのも、もとより親譲りの文才とウキツトとは多分の力をなすとは云ふもの、彼のユニークの存在はその特異な體驗と知識の報酬でなければならぬ。

だから私は思ふのである。何でも良いから渾身の命を捧けて、眞一文字に進め。光は自らそこに見出されるであらう、と。彼の語る淺草の話もさる事ながら、そんなこんなを思ひ合せて感慨少なからざるものがあつた。



新 年

正月が来た、やれ門松だ、やれ鏡餅だと云つて騒ぐ事には、何の價値もないと、私は思つて居た。併しそれはすつと以前の事であつて、そんな純觀念論は物の真相にふれない議論だ。やつと昨今知つて来た。傳統なり、形式なりには、やはり貴い意味がある。生命の表現である事が、甚だ遅まきながら分つて来た。だから今年はやんと、しめなわも張るし、餅飾りも出た。併し「正月が来た」として樂しみもない娑婆世界」と悲觀する程ではないまでも、どうも新年だ、初春だと云つて、強い感激が正直のところ湧かないのである。

又表面こそよしや平靜であつても、床の間を後にして「俺らが春」を讚美し、天下泰平を壽ぐ程の餘裕もないし、勇氣もない。懊惱と焦燥とを内にして目出度く納まる事は、どうしても出来ない。「さらば、さらば祖國よ」と云つてさすらひの旅に出たチャイルド・ハロルドが、や

はり今の私の姿である。さてこそ又暮から新年をかけて、家を離れて遠くもないが、湘南の海濱を漂泊するのであつた。

葉山の別邸は明いてるから使つても良いと云ふ、牛込の伯父の好意を遠慮なく受けて、そこに脚を止める事にした。葉山御用邸から約三丁のところの在り、まことに閑寂を極めて居る。竹溪平山成信氏はこの莊をば

喜聞舊友構新莊。

卜地數弓幽徑傍。

咫尺晨昏好來往。

談風月又語農桑。

と歌つて居る。同じく寒縁翁に翠雲氏から贈られた畫に、清浦奎堂子が讚して

白鶴不啄瑞草青。

道士夜讀神農經。

間之長生有寶訣。

授以松根千載答。

と云ふのがある。詩として私はこちらが好きであるし、又同時に山莊の情趣も傳へて居る。

一體遠慮なくと云ふと、現代政治家の漢詩は概して困つたものである。射山とか二峰とか號する大臣どこの作つた新年のものを見るが好い。てんで詩になつて居ない。字がならんで、平仄さへ合つたら、詩だと思つて居るらしいのだから、愉快なものである。それで絶句が出来たと云ふのだから誠に春はのどかである。講談本を讀んで「俺がのう」の方が罪がなくて、愛嬌があるではないか。

もと／＼獨居閑寂を求めて旅するのが、私の願ひなのだが、どうも私の行く處、風雲はまき起らなくも、やゝこしい問題許り起きて仕方がない。で、學生でも携へて行つたならと思つたが、それでは飯が食へない。ついに薪水の勞のために妻が来る。妻が来れば子供が来ると云つ

た騒ぎである。こんな事だつたら山莊のぬしなる人にも第一濟まないし、これでは又放浪も閑居もあつたものでない。こたつを抱へて、靜かにジムメルやディルタイなどを讀み耽つたのがせめても慰みであつた。

かうして願ひて見れば、私の生活もまことに複雑になつたものである。一寸した旅にもうからやからが飛びだして來ると云ふ始末では、やり切れない。それが人間生活の實相であり、自然ではあるだらうが、まあ何とした事であらう。旅立ちの足手まとひならまだ良い。併し例へば、人生の行路に於て、所信を斷行しなければならぬと云ふやうな場合に、きづなにひかされるやうな事だつたらなどと思へば、空恐ろしくもなつて來る。もとより何と云つても家庭のいとなみは、人間を作る基礎であり、輕舉妄動をいましむる重りでもあるに違ひない。が、なまじい恩愛の情に依つて、幾多の志士が男兒の面目を捨てた事であらうか。自ら頼みとする氣魄なるもの、果していか許り頼りとし得るだらうかと考へて見れば、淋しい氣にもなる。假の旅出でも人生の旅の一斷章である。逗子街道のぼろ馬車にゆられ乍ら、思ひは深い。

そんなこんなで、何方への年賀状もつい失禮して了つた。あたふたと昨日家に歸つて見るとさすが新年である。方々の辱知諸氏から賀状を頂いて居た。未知未見の人のもかなりあつた。誠に恐縮の外はない。その儘はつとく事も出来ないし、かと云つて今頃「謹賀新年」と印刷してもらふのをかしい。何にせよ、こゝに有難くお禮申上げて、何かの機会にごあいさつ申すでしょう。

### 不義理の辯

四月から五月にかけて地方から、種々の客を私は受けるのだつた。四月の初めに熊本<sup>くまもと</sup>の田中君が訪ねて來たし、その終りに國の兄が來た。ちやうど仕事に没頭して居た時だつたので、何一つ案内する暇もなければ、第一心の餘裕だになかつた。そんな風で二人とも忽々引上げて歸つて行つた。五月になると京都<sup>きょうと</sup>の船川君や竹内君が相携へて上京した。併し當時不在勝ちの私はたうとう會つて話す機会もなかつた。中頃には又遠い果てから縁者の來訪を受けて心忙しかつた。それと相前後して大阪の金澤君や、和歌山の山口君が見えたりした。この兩君には一時間許りの時がもてたのみで、一緒に御飯たべる事も出来なかつた。

何れの人達も何や彼と積る話がある様だつたが、心落ち着かない私を見ては、しんみりと話も出来なくて、いかにももどかしい思ひらしかつた。もとよりそれに氣の附かない譯ではない

けれども、一々義理人情の限りを盡して居ては到底仕事の出来る日ではない。目をつぶつて不義理の人間となり、不人情者となり濟さねばならなかつた。それはもとより私にはかなり辛い事だつた。

抑も學究の徒となるには、一々義理だの人情だのと云ふ事を氣にして居たら、物になれない。自分で私は思ふのだが、餘り私は人情味が勝つすぎるやうだ。高等學校に居る時分から、「君のやうに感情が強くては學者にはなれない」とよく先輩から苦言を受けたものであつた。正直のところそんなまじい人情のため、私の學的生活をどれだけ是迄妨げたかわからない。今以て纏つた學問らしい學問の體をなし得ないのは、全くそのせいではないかと思ふのである。

決して私は學問がきらひでもなければ、怠け心がある譯でもない。暇さへあつたら何か讀まないでは居られない。だと云つて勿論決して勉強家でもなければ努力家でもない。併し何と云つても、一番愉快なのは渾身の努力を拂つて、自分の眞の仕事をした後の氣持と云つたらない。その氣持ち、その快味だけは心得て居る。かと云つて、仕事らしい仕事が出来ないのは、さきの邪魔か兎角多いからである。

こんな安價な人情の持ち主と見てとつて、つまり「奴、甘いから」と云ふやうな譯で、種々なものを持ち込んで来る。やれ家を見附けてくれたの、やれうちの子を何處の學校へ入れてくれたの、やれ小遣を何處から心配してくれたのと云ふ鹽梅である。單に私を道具視しようとする人、おつちよ、こちよ、いだから利用してやれと思ふ人、しん身になつて相談する人、などと種々な範疇があるが、それは一々私によく反映する。話しながら、まじくとその人の目を視れば、大抵心根は分る。道具に使はうと云ふ人を峻拒することが出来ないとは思はぬが、来る者は先づ拒ばむまい。あつさりと混濁併はせ飲まうでないかと思つたりして、出来る事ならば引受けようと思ふのである。引受けた以上は出来る限りの事はつくし度いと考へる。かう云ふ妙な人情味が、私をしていつも忙しい思ひをさせる。一面から云へば、私の果敢ないペニティーでもあらう。又私の弱さでもある。

## 精神と物質

さる友人の紹介でI氏が私のもとへ訪ねて来た。I氏はもう幾年かの昔、O市で牧師をして居たと云ふのである。氏は學校を出て間もない頃ではあるし、熱心に傳導布教に務めた。ために相應に信望を集める事が出来た。でも勿論經濟的生活は一向に恵まれて居なかつた。それは今の世とて變りはなく、精神界に働く人の運命である。従つて人の食するものも食べないし、着るものも着れない有様だつた。

でも教會員は皆が皆まで、學生だの貧乏なもの許りではなかつた。で、富める信者は貧相な牧師の生活を憐んで、古着だの足袋だの羽織だのを贈るのであつた。その好意はまことに有難いが、併しまるで犬猫や乞食にでも物をやる態度であつた。I氏はつく／＼と身の不甲斐なさを嘆ぜずには居られなかつた。でも、自分一個の問題ならばまだ我慢も出来たのが、教會の方

針や態度までをも、彼等金持ち信者が支配して居る。ほんとうに神の下僕とも見るべき熱心なクリスチャンの意見は、まるで顧みられないのである。

男一匹の意地をもつたI氏は憤然として醒めるのだつた。神の子だと云つてパンなくば生られない。パンの獨立なきところに思想の獨立はない。政治が全權によつて支配される事を心ある人は憤るけれども、神の國その者がまた全權の横行に委ねられて居るではないか。と云ふ様な譯で、I氏は親鸞が比叡の山を下る心をもつて、決然教會を去つた。そして滿鮮の地に雄飛して、實業界に投じて了つた。かくの如くして、併し氏は果して安きを得たであらうか。

かくて氏は教會を去つたにしても問題は残されて居た。こんな經驗をば氏はしみ／＼として述懐するのであつた。私は、それに對し十分解るやうな氣がする。殊に近頃私は經濟の勢力が如何に大きいものであるかを、痛感せずには居られないのである。「金位何だ」と馬鹿にしきつたものである。取れば取るに任せて使つた。「焚く程は風がもて来る落葉かな」で、何とかならうではないかと、前後の分別もなく使つたものだつた。而も世のなかはさう生易しいものではないし、榮々とか何とかなるものではない。金が不如意だと、妻の前にだつて頭は上がらない。

「貧乏は不徳にあらす」と云ふ哲學をもつて居ても、少し借金でもあらうものなら、その人に對して思ふ事も口はばたくて云はれないのである。それを超越するだけの圖々しさは、或は習得されるでもあらう。併しその義理だに知らぬ様では、世間は渡れない。

今更唯物論の前に降伏する譯ではないが、金力の偉大さは、何にしても現代人の牢記すべき大事實である。事實として經濟生活の確立しないところに社會の信用はあり得ないし、信用は社會生活の根本條件である。まことに空恐ろしき限りではないか。獨り私の實際生活許りでなく、私の人生觀や乃至學說に經濟思想がまるで取入れられて居ない、とはよく今迄注意されて居た。その缺陷に氣つかぬではなかつたが、それ程までの難點とは思はなかつた。併し今にして見逃し難い缺陷である事を覺ゆるのである。いかに新聞の二頁大の廣告におどろかされるにしても現代の救済をば唯物論的解決のみ仰がうとは夢々思ひ得ない。でもお經許り讀んで、「高根に澄める秋の夜の月」を氣取つて居ては、現代人の生活には餘りに縁遠い。この二つの世界を綜合したものが、現代人のもとめるものであらう。當然現はるべき切實な思想でありながら、まだ現はれ得ない。さてその時は何れの日に來るのであらうか。

## 文教の府のあらし

1

師範教育改革案に對する感想を求められて、書かうと思つてゐる時に文教の府を中心とする政界の暴風雨が起きた。師範改造案どころの騒ぎでない。その大本山が死生の間を迷ふ今日である。黙つて居られない氣がするのだ。中島男が商相の椅子を投げ出したのは、まだ一日にもならぬ内に、またこのあらしである。いかに政治は水物とは云ひ條何と云ふ慌しさであらう。前商相の引退の直接動因をなしたのは云ふまでもなく「尊氏論」であつた。すでに叛賊だと定まつたものを、あたら大臣の身を以て禮讃したと云ふのだから事態隠やかでない云へば、それに違ひない。併し又考へて見れば十年も前の原稿で、而も何時の間に出たのかも知れない。

而も、今では、その非なる所以も認めて居るし、百方詫びても居るのである。それが遂に聴き入れられないで、パンクした自動車のやうに引込んで行かねばならなかつた。大臣と云ふもの命はあんなにも惨めにもろいものかと痛感した事だつた。「誰一人の援兵もなく淋しかつた」と云ふ自身の述懐通り人の見る眼も憐れであつた。

が、鳩山氏の場合にはさすが、政黨の背景があるので、こんな簡單なものでないらしい。事の起りは岡本代議士の發言からである。樺太工業から幾萬圓かの金銭の授受があつたとやら、なかつたとやら云ふのであるために、同代議士は勿論のこと、その背後の人物として、更に某日二代議士は政友會から除名された。鳩山氏は事の如何を問はず辭職は避け難い状態にある。政友會は岡本氏の一石に依つて、すさまじい内紛を惹起し、望月長老の議員辭職となり、遂に分裂のところまで發展する事であらう。一方鳩山氏にして見れば、見す見す疑惑の儘に地位を去るやうでは、將來の政治生活の上に致命傷となるので、犬死はし度くないとあつて、内閣總辭職にまで漕ぎつけやうと百方努力中であるかのやうに、新聞は報じてゐる。

つい先達てまで教育界の疑獄に關する引きりなしの報導で、大衆は眼をまるくして居たもの

だが、この大地震で校長や視學の贈收賄などセンセーションを起こさなくなつて了つた。今日の新聞などは、東京市の疑獄に足りないと言ふのか、岡山の事件が大きく報ぜられた。併しいかに大勢の先生達が珠數つなぎになつたとしても、大臣があれだもの仕方がないさ、と大衆の氣持は誰云ふとなく、さう動いて居る。

軍部の偉大なる功績はもとより認める。その忠勇無比なる點も、誰とて異存はない筈だが去年の夏大阪に於けるゴーストツブ事件以來、實云ふと軍部に對して今迄のやうな好感が持てなくなつた。當今の場合、大きな聲では云はれないが、あちこち目に餘ることも少くなかつた。それにつけても政黨の無氣力を膺甲斐なく思ふたのは一再に止まらなかつた。ところで今年初頭議會休會明けに當り、毎度代議士其の他に依つてなされた質問演説はまことさつさうたるものがあつた。議會政治の爲めにあげた氣焔は我等の意を強からしめたものだつた。と思つたのは東間で、一寸のうちに馬脚を現して了つた。元のもく阿彌どころが、一層見るに堪へない醜

くさが、こんどの事件で展開されて来た。

聞けば岡本氏は故森格氏の知遇を得て居た人とやら。従つて鳩山氏とも悪い間柄ではなかつたさうな。森氏と交誼から云つても今更鳩山氏の曝露でもなからうとの、世間の取沙汰である。殊に日日報導される査問會の様子から見れば、氏の應答は支離滅裂で兎角首尾の一貫を缺いて出たための感じが少くない。従つてその動機の純真さすら疑はれても仕方がない。國家のためには私情を殺すも是非がないと、氏が云はうとしても、それは只言葉の上の見得としか世人は思はないであらう。今日も今日とてさる消息通の話を聞いた處に依ると斯うなのだ。この度びの騒動は皆久原氏一派の打つた芝居だと云ふのである。氏が政黨の大同團結を主張し、一國一黨を力説するのも深い深い魂膽があるのださうな。久原氏關係の事業會社は、平時にはからきし振はない。併し戦時に在つては之に反し素晴しく景氣が良いのださうな。石炭だ、銅だ、飛行機製作だと云つた鹽梅に、その凡ての事業が所謂軍需工業と稱するもので、現下の事局に悪からう筈がない。

こんな風に氏の關係會社は皆が皆まで、とん／＼拍子で、羽振が良い。氏の懐には金がう

なつて仕方がないとやら。この間からの芝居の資本はすつかり久原氏から出て居たのだと取沙汰されて居る。除名問題の二代議士は勿論同氏の一派だとは衆知のところである。この問題にからんで政友會内部では四人の調査委員が指名された。除名云々にからんで長老望月氏は議員辭職となつた。それは黨幹部と行違に依るものだと思はれた。若し夫れ岸田總務に至つては、幹部派即ち鈴木總裁派ではない迄もその支持者だと私なんかは考へて居た。然るにだ、政界の裏面はしかく簡單なものでないらしい。島田氏の除名主張にはちやんと久原氏との策應があつての事で黨内攪亂がその目的だと云ふのである。これでは先代萩の御家騒動より、まだ淺間しい。餘りと云へばあくど過ぎはしないか。査問會の方は、叩けば叩くほど塵や芥が出て、思はぬ人々や材料が飛び出して、沙漠のなかでプロペラーを廻すやうなものだ。が、どんなにしても淨財であらうとなからうと、金錢の授受なんか、むしろ罪が軽い。陰險邪惡の策動は、いかに考へても好感がもたれない。殊に凡ては徹頭徹尾自己の打算に出でて居ると聞いては、ほんとうに泣き度いやうな氣持さへ起るのだ。こんな事ではいかにしても久原氏に人氣が集まらうとも考へられない。



この渦中には入るまいと云ふので床次氏は靜觀的態度を執つて居る。最初には、例の注意心から、又しても脱黨か分裂の音頭取かと思つて居たが、今度は直接氏自身が久原氏と提携して居るのではないらしい。にしても之も又氏自身の持味たる洞ヶ峠をきめ込んで居る譯である。洞ヶ峠と云ふのは一見隱健のやうだが、その實無主義無定見、否無貞操ですらあるのだ。元來久原氏にしても床次氏にしても人に接するに春風殆蕩とした應揚さをもつて居るし、その如才なさと相手をそらさぬ細心さで政界の友人筋では、器が大きいとの定評であつた。併しである。どんなにスケールが大きからうと、そんなに何時も何時も日和見の御都合主義では大抵嫌になつて了ふではないか。と云へば、餘り世間の苦勞知らずの言葉であらうか。

3

政界に縁もゆかりもない私が、さも心得顔にこんな事を書立て、一體何になるのだらう。考へて見る迄もなく、まことにつまらない話ではある。かう私がかいた處が、皆事實でもあるまいし、又真相をうがつて居ると自負する譯でもない。よしや、さうでないにしろ、當今の政

治界といふものはざつと斯んなものだと言ふ事だけは間違ひあるまい。

それだからと云つて、浮世が七分三分に暮らせられたら、それも良からう。が、どうしてもそれではならない何者かが残る。只この世をば茶化して濟まされない或もの、存するのは、どうしようもない。

今日も某新聞社の幹部と話したことであるが、去る滿洲事變の折、彼の地の寫眞は飛行機で運ばれた。かかる機能を果し得たものは、只大毎大朝の大資本のみよく之を果した。それだから俊敏の頭腦や才腕あるものを持つて來ても、この大資本の前には爆彈と弓の争ひにも及ばないのである。あの大鐘紡を築き上げた武藤山治氏が早朝から深夜まで時事新報社の社長室に納つて敏腕を振つて見ても、大資本の前には齒も立たないのである。巨大なる資本に對しては、人間の力が只憐れに見える許りである。

何處を見ても、かくして只悲惨な委許りである。こんな行詰つた世相に光明を齎らすものは爲政家でなくてはならぬ。ところが頼みとする政治家は政治家で、さきに云つた有様

だとすれば、一體どうなると云ふのだ。只暗澹として、望みも力もなくなるのみである。考ふれば考ふる程悲觀の材料許りである。

とは云ふものだ。物は思ひやうだ。今日ほど國威が世界に向つて、伸長したことがあるか。今日程世界がわが國に關心をもつた事が又とあつたか。又國家總動員時に今日ほど國內の統一を保つた事が今迄にあつた。かいかくに國債が多ければとて、負債で倒れた國家はない。といふ風に見て來れば、洋々たる希望は漲る。誰か知らこの重大時を擔當する人材が現れさうな氣がしてならぬ。それは私のみの一時の氣休めとは思はれない。悲觀絶望のなかに誰しもの胸中にかかる待望の心があるのみではなからうか。では、その人材は何の方面に現れるだらうか。暫く時の推移を見るとしやうではないか。

## 教育界の慢り

1

時世が時世なので、傷心の事尠くない。相次ぐ親子心中、さては有閑マダムの曝露などと物の衰れを止めるものだが、中にも悲惨なのは、東京初等教育界の疑獄である。次ぎ次ぎに、一方の校長が贈賄のかどで收監され、果ては底なしの疑獄とまで、呼ばれるに至つた。昨日の夕刊では、市の學務課長またとうとら檢舉拘束されると報じてゐる。代議士などの選舉違犯や大官の收賄などは、今ではむしろの通常事として世人の耳目を聳たしめないし、何等センセーショナルを捲き起さない。が、校長先生がどうかうと聞いては一寸憂鬱の思ひを抱かざるを得ないのは、獨り私許りではあるまい。それを聞いた學校の兒童達は、どんなに胸を痛めたか、と思

ふと暗然たらざるを得ないのである。

児童達にとつては、學校の先生と云へば、君子聖人どころの騒ぎではない。まして校長先生と來ては、神とも佛とも思はれるのである。都育ちの子供には、私なんかのやうに山出しと違つて、同じやうには行くまいが、何と絶大の信望は一寸大人の想像を許さないものがある。その人が事もあらうに、細目のはづかしめを受くると聞きたい、いけな胸を苦しめねば、嘲笑的な捨鉢の氣持にならう事は考へられやう、今更のやうに馬鹿にし度くならうと云はうと云ふものだ。臭いものには蓋をしろと云ふのは、一體私は嫌なのであるが、出来ることなら、せめて今度の教育疑獄事件だけは、新聞記事としない術がなかつたらうか。など及びもつかない愚痴も云ひ度くなる。

でも實云ふと、東京の教育界に於ける情實關係と云ふか、收賄云々の實狀に就いて、私達が世間話で聞いたのは、昨日や今日の事でなかつた。して見るとかうした現象は、かなり因縁と歴史があるやに想像される。むしろかくなるべき運命の種が宿されて居たと見ねばなるまい。それならば、何も何時までも伏せておくべきでなかつたらう。腐つたものに、飽く迄蓋をし終

ほせる譯もあるまい。痛は痛として外科療法を施した方が、さばさばして良い。精算するものは精算して、切開するものは切開しなくては、體そのもの、破滅の外、何ものをも得られる道理がない。かうと考へて見れば、今度の檢舉當局の活動と新聞の報道とは、根本療法のため、機宜の處置として喜ばねばなるまい。

とは云へ、現代社會に於て、痛は教育界のみに限られると云ふのでもない。又不治の病なるものが、校長先生や視學さんに限つた譯でもないのだ。それらの人達はむしろ雜魚にも當らないのである。所謂吞舟の魚が、ここかしこに散布蟠居する事實は、既に常識にすらなつて居ると思へば、千や二千の金高で、終生浮かばれないのかと思ひ遣ると、悲惨の限りで、氣の毒に堪えられない。よしんばだ。視學や校長に、かかる犯罪のありとするも、彼等のみ罪だとは斷ぜられない。社會狀勢一般がその責の一半を有たねばならぬ。

悲惨と云へば、こんなのがある。私など大した社會的地位をもつて居ると云ふのでないのに

就職運動の爲めに履歴書携帶の來訪者が毎日二三名は下らない。それに別段今では驚きもしないが、先達て私は母を亡した。ために知人同友諸君から弔詞を受けとつた。その中に弔詞をのべた後就職を依頼するのがあつた。これでは切角有難いと思ふ念も失せて興ざめも甚しい。むしろ腹立しくさへ思つた。ところが斯んなのが一通や二通ではないのだ。果ては五六通もあるに至つて、私は母の死よりも、更に暗い氣持に襲はれた。いかに世智辛ければとて、悔みの手紙にさへ職業問題を切り出さねばならぬのか。今は腹立つ氣力よりも、現代の世相に對し暗然たらざるを得ないのである。誠に、社會狀勢の急迫を物語つて餘すところがない。

現代人は職業戦線に立つて、寸分を餘さないまでに、どんな機會をも逃すまいとする。斯んな事を思ひ合はせると、校長などが自分の生活戦場のゴールに入らうとする氣持ちも、どうやら理解されると、生命線を保持するためには、何者の犠牲をも顧みない心も解るのである。むしろふびんでもあり、氣の毒でもある。

それにつけても、中島前商相の話が思ひ出される。今日友人I君と高島屋の近所で晝飯を食べた。その時談偶々前商工大臣中島久萬吉男の上に及んだ。男は「尊氏問題」でもろくも引責

辭職するに至つた。その直前男は製鐵合同と、帝國人絹の問題で散々議會で油を絞られるのだつた。この問題を中心を取扱つた「番町會を曝く」といふパンフレットに依れば、この兩方で中島男の懐ろに入る金が一千萬圓を下るまいといふのである。却つて男のために辭めた方が都合だつたらうと、I君は語るのだつた。辭めた感想を新聞記者に叩かれて、

「一人の味方もなく淋しかつた」

と述懐して居たが、これは世間への挨拶と云ふもの、却つて心中、男は辭めたのを北叟笑むで居るだらう、とまで彼は付け加えるのだつた。何しろ一二年大臣をやつて居て、千萬圓の金が轉げ込むのなら、悪くはあるまい。中島男が、てつきりそれだといふのでもないが、こんなのに較べると校長の贈賄なんか、取立てて騒ぐ程の事でもあるまいに、と思つたりするのだ。

と云つて私は彼等校長諸君を辯護しやうと云ふのではない。只かうまでしななければ、生活場裡に立つて行けない世相を悲しむのみである。が、待て暫しである。いかに世智辛らいからと云つて、法の禁ずる處までも侵さねば、生活が出来ないまでに行詰つて居るのであらうか。急迫の世態に直面したところで、犯罪しなくては行けないものは、どうしても私には考へられ